

書評

1991.4.3
第95号

書評編集委員会

特集

読書案内

「在日朝鮮・韓国人問題」を問う



特集 ● 読書案内

『書評』編集委員会より	山川 雄巳 (法学部教員)	4
書を読み、書を書く	吉田 徳夫 (法学部教員)	6
天皇制と歴史学	井上 泰山 (文学部教員)	8
私の「履歴書」		10
われわれの本を読むように言いなさい		
——文学と社会	中山喜代市 (文学部教員)	12
文庫本・釣り三題	森岡 孝二 (経済学部教員)	14
勝てば冠軍？		
——とんでもない	楠 貞義 (経済学部教員)	16
○先生のことなど	鍛治 邦雄 (商学部教員)	19
社会を読む 自分を読む	池島 正興 (商学部教員)	21
しなやかな明晰さのために・読書メモ	雨宮 俊彦 (社会学部教員)	23
専門書を読むために	大石 裕 (社会学部教員)	25
「どこでもドア」を開く楽しみ	馬場 昌子 (工学部教員)	27
〈文庫〉ことはじめ	鉄川 精 (工学部教員)	29

特集 ● 「在日朝鮮・韓国人問題」を問う PART II

『書評』編集委員会より	吉田 永宏	31
〈在日朝鮮人文学〉論の前提		

おいてけぼり——宮本輝試論 VI 芝田 啓治 44

投稿

〃現代思想の快楽〃そのII 松原 恵二 53
それゆけバタイユ——ロード・オーシユ眼球譚は痙攣するか

連載

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート XI 梁 永厚 62
学校閉鎖に抗して

研究余滴 象徴主義 4 第2章 象徴主義の先駆者たち 山村 嘉己 71
I ボードレールとかれに先立つ人々 芝田 稔 83
日本中国ことばの来往 その40

短評

壁のない病室 90
広告進化論 91

羅針盤 2
「所感」↑「書感」 92
お知らせ ・ 投稿募集 94
・ 「書評」編集委員募集 95
編集後記

題字 ■ 網干善教 (文学部教員)

1991.4 羅 針 盤



本当に戦争は終わったのだろうか。約一ヶ月前の三月一日、米国大統領の演説は、「クウェート解放の為」と銘うった「湾岸戦争」の「停戦」を告げた。マス・コミは「平和が戻った」と喧伝し、こぞつてフセインのスキヤングラスなニュースと、「イラク叩き」に奔走している。米国は「戦勝国」となり、『フセイン打倒』をこぞとばかりに叫んでいる。日本では、多国籍軍援助の九〇億ドルの行方はうやむやになり、PKO（平和維持活動）への自衛隊の参加が目論まれている。にもかかわらず、日本のマス・コミにおいては、都知事選を始めとする地方統一選挙、大手企業の不正などのニュースが、「湾岸戦争」のそれにとつてかわっている。戦争の被害者のことなんか忘れて。三月一日に予定されていたとある集会は、デモを「停戦したから」取りやめ、もう一つの集会では参加者が減ったという。反戦運動の中にも、「平和が戻ってきた」気分は蔓えんしている。

しかしパレスチナー中東和平の要であり、八月のイラクのクウェート侵攻以降、大きくクローズアップされてきたパレスチナにおいては、より一層の危機感がつづっている。イスラエル政府は、パレスチナ占領地からの撤退を拒否し、PLO（パレスチナ解放機構）との絶縁を全世界に吐きだしている。世界はといえば、「湾岸戦争」

の「停戦」に惑わされて、パレスチナからも遠ざかりつつある。まさに今こそ、パレスチナは戦争状態よりもひどい状態に追いこまれようとしている。

パレスチナ問題の本質は、ユダヤ人を利用した、米英を始めとした「先進国」の中東侵略である。聖書を根拠として、ユダヤ人が「聖地奪還」を唱えたため、パレスチナ問題は、宗教戦争の様に語られる事が多い。しかし、ユダヤ人は、ナチズムによる迫害の後、米英に中東侵略の尖兵として利用されているのである。「土地なき民に、民なき土地を」のスローガンが示すように、パレスチナにおけるイスラエル建国は、パレスチナ人の絶滅を意味している。ユダヤ人は、かつてのヒトラーによる迫害を忘れ、全く同じ、いやそれ以上の残酷な行為をパレスチナ民衆に行っている。こういったイスラエル政府に抗する闘いの中で組織されたのがPLOである。日本では、『パレスチナ和平交渉はパレスチナ民衆を相手に』といったコメントと共にPLOにソッポを向くブッシュ大統領の漫画(朝日九一・三・一二)に象徴されるように、PLOはパレスチナ民衆から乖離しているかのごとく言われている。しかし、PLOはパレスチナ民衆をあらゆる面で支えている組織であり、祖国パレスチナへ戻ることと同時に、パレスチナでのユダヤ人との平和的共存を

も目的としている。PLOこそがパレスチナ問題の解決における当事者なのである。

PLOについても、「湾岸戦争」についても、私達はどれだけ「理解」してきただろうか。テロ組織だの日本赤軍だのといってスキャンダラスな側面ばかりが強調され、中東の歴史さえも知らされていない。今回の「湾岸戦争」を機に、中東の歴史をひもといた人も少なくないはずだ。そしてその「湾岸戦争」は、戦争の本質は全く語られず、スカッドだ、パトリオットだ、と「対岸の火事」のように、テレビゲームのように、多国籍軍側の情報が流されていたに過ぎない。そして日本政府は、これを機会に、もう一度戦争できる国家体制作りに奔走した。戦争状態がないと、「平和」について考えないようではいけない。軍事力行使が見えた時だけしか、「戦争反対」と言うだけではない。日常的に、「平和」について考え、行動して行かなければならない。

一九九一年四月、まさに歴史的転換点に我々が立たされているこの時に、とりあえず「自由な」大学生活に身を置く我々学生は、今、何ができるのだろうか。明らかに、悪い方向へ進もうとする日本の、軌道修正のために。



読書

という

小旅行

やっと、受験シーズンも峠を越え、ハッと気が付いて辺りを見回してみると、受験参考書や学校の教科書なんか散乱していたりする。たくさん勉強したなあなんて、へんに充実感に浸ったりしてみるけど、よくよく考えてみると、これはある意味での受け身的な「読書」だったんじゃないか。

そう、私達はこの春、参考書から解放されたんだ、皆さん、本来の読書をしましょう。といっても、なかなかすぐには取りかかれないのが現実でしょう。特に私達、映像メディアが浸透しきっている世代にとっては、一冊の本を開く

読書案内

山川 雄巳……………6 (法学部教員)	鍛治 邦雄……………19 (商学部教員)
吉田 徳夫……………8 (法学部教員)	池島 正興……………21 (商学部教員)
井上 泰山……………10 (文学部教員)	雨宮 俊彦……………23 (社会学部教員)
中山喜代市……………12 (文学部教員)	大石 裕……………25 (社会学部教員)
森岡 孝二……………14 (経済学部教員)	馬場 昌子……………27 (工学部教員)
楠 貞義……………16 (経済学部教員)	鉄川 精……………29 (工学部教員)

だけで活字が洪水のように押し寄せてくる圧迫感さえ感じるものです。

また、最近の若者は主張のない希薄な存在だと言われます。これも映像メディアによって、われわれの視野が偏狭なものとなって、画一的な物の見方しか持たない若者しか作られないという弊害が指摘される所以でしょう。

いろいろな本を読み、人それぞれが様々な主義・主張をもつことがわれわれ若い世代にも必要だし、社会全般にも必要なことじゃないだろうか。

ここでは、「読書」の先輩である各学部の先生方が、本を読むことの「素晴らしさ」や「おもしろさ」を語り、読書という小旅行への水先案内役をしてくれます。

書を読み、書を書く

山川 雄 巳

やまかわ かつみ
法学部教員。専攻は政治学。

新生生の皆さん、入学おめでとう。大学に進学して迎えられる新学期には特別の感慨があると思います。皆さんは、まさにいま四年間の大学時代と青年期を迎えようとしているわけです。

青年期というとき、私が思い出すのは、与謝野鉄幹の「妻をめとらば才たけて、眉目うるわしく情ある。友を選ばば書を読みで、六分の俠気、四分の熱」という歌です。素朴で単純すぎるといふ人もあるかも知れませんが、すくなくとも、書を読まず、正義感がなく、人情を解さず、意欲

的でないような青年が、人から頼もしがられたり、異性に憧れられたりするとは思えません。

さて、鉄幹もあげている「書を読む」ことについてですが、まず、大学生生活で基本となる読書は、受講する講義科目の教科書をすべて、それも丁寧に読むことだ、ということを強調しておきたいと思います。「よく学び、よく遊ぶ」といいますが、「よく遊ぶ」ための時間的な余裕と解放感を生むためには、まず学ぶこと、とくに教科書をよく読んでおくことが効果的です。

では教科書はどのような仕方ですればよいのでしょうか。学生諸君に聞いてみると、たいいてい授業に持参して、講義の進度に合わせて読むようです。先生の話を聞きながら初めて読むのです。これは無理からぬ方法だともいえますが、本の意味が頭によくはいるのは、静かな環境でひとり読むことだということからすれば、教室で初めて読むというのは、まずい方法なのかもしれません。

学部の教科書は専門書の一つであるのが普通で、専門書は一挙に通読することが困難なものです。それは専門書が専門的な術語で構築された重層的な構造物だからです。そこで根気よくかじって消化していくわけです。多分、講義のとき読むだけでは教科書は消化不良になりやすいでしょう。ひとり静かに予習しておけば、消化ははるかによくなるはずですが、しかし、復習をすれば、さらに

よくなるでしょう。こうした自習のさいに役に立つのは良い辞書やハンドブックの類です。そこで、あなたがもし法学部の学生だとすれば、定評ある分厚い法学辞典や政治学辞典を、経済学部の学生ならば経済学辞典を、買ってしまふことをすすめます。それを自分の机の上で参照しながら、教科書をすこしずつ読んでいくのです。辞典は大体、一流の学者が執筆していて内容的に安心ですし、特定の専門領域をこえる広さをもつていて、教科書から離れて独立した読み物としても有益です。最初は痛い投資だと思いかもありませんが、長い眼でみれば結局、安い買い物になるはずですよ。

次にすすめておきたいのは、「書を読む」だけでなく、「書を書く」ことです。「書を書く」というのは、ちよつと変な言葉だと感じるかもしれませんが、ここでは「本を書くこ

と」や「書道をする」ことではなく、「書きものをすること」を意味します。「書きものをすること」というと作家や学者の仕事のようですが、作文の能力は社会のいろいろなところで要求される能力です。「書を書く」必要を私が強調するのは、それが、受け身の知的消費に終わりがかねない「書を読む」よりも、能動的な知的創造に直接につながっているからです。

大学生が「書を書く」ことは、講義ノートをとることに始まるといえるでしょう。しかし、先生のいうことをそのまま記録するだけではつまらない。先生方は講義で、なんらかのテーマについての研究成果を話されるわけですし、先輩・後輩の区別はあれ、皆さんにも研究者としての姿勢で講義を聞くようにしていただきたい。その場合、当然、皆さんのノートには、先生の講義の記録だけでなく、これに関連して皆さん自身

がもった「何何とは何か」という疑問や関心の記録、これらについて参考書や辞典、ハンドブックなどをひもといて研究したことが記録されているのでなければなりません。そして、たんに記録するだけでなく、記録を分析して整理し、皆さん自身のアイディアや思想をあとで読んでみてもわかるような、筋道の通った文章にまとめるようにして行ってほしいのです。

当座のメモは汚くても仕方ありませんが、まとめにさいしては、正しい字を書くことはもちろん、句読点の打ち方、改行の仕方にも気を使うようにして下さい。そうした訓練は、大学ではレポートの作成や試験答案の作成にさいして有益ですし、将来、皆さんが会社や役所で企画書や稟議書を書くときにも、かならず役に立ってくれるはずですよ。

天皇制と歴史学

吉田 徳夫

よしだ のりお
法学部教員。日本中世法制
史専攻。

昭和天皇の死後、その死の儀礼に

始まり、即位・大嘗祭に至る一連の皇位継承の儀礼が挙行されたことは記憶に新しいところである。これらの諸儀礼の中には現憲法下において法的根拠をもたず、そのためというわけではないだろうが、旧天皇制との連続の問題が露呈してきた。横田耕一『天皇と日本国憲法』にその問題点が色々指摘されている。

例えば、宗教的性格をもつ大嘗祭について、政府が「公的性格」を認めるなど、信教の自由を侵す重大な問題があった。しかし、昭和天皇の

死と共に直ちに行われた「剣璽等承継」儀礼のもつ意味については論議の俎上には登らなかつた。私見によれば、これも宗教的性格をもつ行為であり、そのイデオロギーの問題は今日でも重大である。「剣璽等承継」の剣璽は神器であり、その剣邇の伝授は踐祚儀礼の本質をなすものである。

もとより踐祚と即位とは同義であり、これが平安期以降に分離し、今回の皇位継承においても同様であったが、その分離の理由については不問に付されてきた。石尾芳久『人権

思想の源流と部落の歴史』は、その分離のイデオロギーとして触穢思想があったと見ている。すなわち、皇位継承において天皇の死穢を排除する便法として踐祚が分離してしまつたというのである。天皇については、その神聖性を云々した戦前において、天皇の死穢の問題が不問に付されてきたわけである。

今日も「剣璽等承継」儀礼が即位と分離して行われたことの呪術宗教的意義についても看過しえない問題であった。天皇制については未開拓な研究分野が多いことは、この例をもつても言うことが可能である。天皇制の政治的側面についても、象徴天皇制を肯定する立場から、歴史においても天皇は不執政であったという石井良助『天皇』の研究がある。しかし、古代・中世のみならず戦前の旧天皇制を例外というわけにもいかない。また、不執政の天皇といえ

ども、常に政治中枢に関与し、他方において天皇制のもつ呪術宗教的側面の意義を無視するわけにもいれない。この側面を「天皇教」として理解する試みもある。

本年度の法学部一般演習で、今谷明『室町の王権』をテキストとして使うことにしている。昨今の天皇ブームの中で、この著書も注目を浴びた著書の一つである。同著は主として足利義満政権を研究史を踏まえて叙述された好著である。同氏の構想は「王権の篡奪」という副題からわかるように、將軍が天皇の王権を篡奪しようとするものであったというものである。その試みは挫折し、そのため天皇の權威は復活したと評価されている。復活したという評価の仕方については疑問は残るが、案外こうした仕方は多いのも実情である。中世後期の研究は今後の研究が待たれる処だが、その困難な処は將軍

と天皇との関係の理解の仕方に関わっている。例えば、足利義満が死後に太上天皇号を贈られたが、その子の義持がそれを辞退したという問題がある。戦前の田中義成『足利時代史』等では、辞退の意義を大義名分論の見地から説明しているが、辞退ということの歴史的意義についてはもう少し掘り下げて考えてみる必要がある。權威と権力の問題に則して考えれば、これを分離して考えるのは不適切であり、まして天皇の權威だけが独り歩きするわけでもないだろう。こうした天皇に対する評価は、我々の天皇観と密接に結びついているのであるが、こうした天皇観がそのまま象徴天皇制を支えるイデオロギーであっていいのかは、問直す必要がある。

以上、読書案内としては不適切であるが、私の目下の関心に従って述べてきた。例示した著書はいずれも

文庫・新書等であり、入手容易なものばかりである。関心のある方は是非一読して下さい。

私の「履歴書」

井上泰山

いのつえ たいざん
文学部教員 専攻「中国古
典小説・戯曲」

人は誰しも、みずからの限界を背負って生きてゆくほかはない。しかも、不公平なことに、その限界たるや人それぞれに千差万別である。だから、とかく他人の生きざまが気になる。ちよつと覗いてみたくなる。

いわゆる自叙伝の類がわれわれを惹きつける所以は、おそらくそんなところにあるのだろう。

が、残念なことに、巷にあふれる自伝類は、大抵こちらが期待するほど面白くはない。それは、著者の人生がごく平凡なものであるにもかかわらず、いかにも波乱万丈これ見よ

がしの井の蛙に、御本人自身がお気づきでなかったり、あるいは反対に、稀有非凡の生涯を生きぬいていながら、みずからの恥部をさらすのを嫌って、とかくキレイ事に終始してしまふからである。

ところが、ここに紹介する南方熊楠の「履歴書」だけは例外中の例外。余人の到底及ばぬほどの非凡な生を送り、かつ、みずからの恥部をも公然とさらしてはばからない。本人の生きざまがまるごと見える、稀代の一文である。

熊楠は江戸末年（一八六七）和歌

山の生れ。明治十九年、二〇歳でアメリカに渡り、各地で植物を採集した後、二六歳で渡英。大英博物館を中心とした九年間の独学を終え、明治三十三年に帰国して神戸港に降り立った際には、「おびただしき」「書籍標品」以外には文字通りの無一文、「実は船中で只今海軍少将たる金田和三郎氏より五円ほど借りたるあるのみ」というありさまだった。

時に熊楠三四歳。以後、田辺を永住の地と定めて動植物の研究に没頭するも、資金不足のため、集めた標品類が虚しく粉末と化していくのを見るに忍びず、植物研究所設立を企図。基金を募るべく、日本郵船株式会社大阪支店副長、矢吹義夫氏に宛てた自己紹介の書簡が、すなわち、標題に掲げた「履歴書」である。

生い立ちにはじまって遊学中の様々な体験に触れ、親戚との不和がもたらした苦学のさまや、時代の閉塞

に起因する研究上の困難など、熊楠を「通り一遍に観察せし人々の出たらぬ」を正してみずからの学問遍歴を余すところなく説き綴つたこの文章からは、熊楠の生きた時代の限界と、そこに身を置く苦悩とが、手に取るように伝わってくる。

民族学者、考古学者、宗教学者、哲学者、植物学者、人類学者、自然科学者、等々、ありとあらゆるレッテルを貼りつけてもなお、その全体像を蔽いきれないほどの、まさに巨人の名に相応しい人物、熊楠。その名は、生涯に書き残された膨大な量の書簡によつても記憶されるべきである。

今は亡き熊楠先生に、学問の道いかにと問えば、師曰く、
○何にせよ学問は一生暇あればすなわちと出かけるべきなり。いやな学問を無我無尽にやりとおして何の益がある。(杉村広太郎宛)

○人に物問うをのみ学問と心得るものは、自分の心を喪い果てたる胸中無主人のものなり。受売りの本家なり。学問すべき人間にあらず。(土宜法童宛)

○宇宙万有は無尽なり。ただし人すでに心あり。心ある以上は心の能うだけの楽しみを宇宙より取る。宇宙の幾分を化しておのれの心の楽しみとす。これを智と称することかと思う。(同右)

○人間卑劣なるものは、いかに学問しても、またその理を知りても改められぬものと見ゆ。(同右)
熊楠の著作を読むたびに、私はある種の虚脱状態に陥る。全身の力が抜けて、動くことさえも億劫になるのだ。それは、片時も我執を離れられない自分がいかにかちつげな存在であるかを、したたかに思い知らされ、打ちのめされるからであるが、不思議なことに、そうした虚脱感が

去つたあとに、何かしら言いようのない力が湧いてきて、俗世のささやかな営みにも再び無心に取り組むことができるようになる。時折私は、そうした虚脱感を味わいたくて熊楠を読み返す。私にとつて、それは万巻の人生案内にもまさる。

「一生官途にもつかず、会社役所へも出勤せず、昼夜学問ばかりした」「畸人」の、汲めども尽きぬ泉にも喩うべき智の宝庫。扉をたたかぬ法はない。

蛇足ながら、「履歴書」は平凡社刊『南方熊楠全集』第七巻に収められ、本学図書館蔵書のカードナンバーは [081.8 M1 2-7]。

三二段の石段を上つて自動ドアを入り、静かにカウンターに向かうだけで、熊楠の世界は今日から確実に君のものとなる。
日常と学問の接点が見えてくるのである。

われわれの本を読むように 言いなさい

— 文学と社会 —

中山 喜代市

なかやま きよし
文学部教員。

『新フェミニズム批評——女性・

文学・理論』(青山誠子訳、岩波書店)

という本がある。「彼らに、われわれの本を読むように言いなさい」というのは、あるセミナーにおける講演者が、友人のフェミニスト批評家たちによって勧められた一二の提案の一つである。好奇心の強い人のために、もう一つ付け加えると、「彼らに、われわれが、なにを彼らのためにしてあげられるかを話しなさい」というのもある。

一九八〇年代に入ってから、フェミニスト批評が盛んになってきた。

一九八三年に出版されたアリス・ウオーカーの『カラー・パープル』(柳沢由美子訳、集英社文庫)と、

一九八七年に出たトニー・モリスンの *Beloved* (ピラヴド) は、それぞれ翌年にジュリッツァ賞を受賞した。これらの黒人女性作家の活躍に象徴されるように、黒人女性にかかわるフェミニスト批評活動も盛んである。『わたしたちのアリス・ウオーカー——地球上のすべてのわたたちのために』(河地知子編著、御茶の水書房)という情熱的な書もある。

要するに、いま、われわれ(とく

に男性、一般読者も?)は、「古典的・大衆的男性文学における女性への文学上の虐待、つまり、テクニク上のハラズメント(セクシュアル・ハラズメントをもじったもの)、また女性を文学から閉め出すことなど」の暴露や「女性文学の発見」という初期的な運動を経て、「女性が書くことへの認識のみならず、文学研究の基礎概念についてのラディカルな考え直し、すなわち、男性の文学体験に全面的に基づいてきた読むこと書くことについて、従来受け入れられてきた理論的前提の修正」見直し(『新フェミニズム批評』五九頁)を迫られていると考えてよいであろう。

アリス・ウオーカーは「ブラック・フェミニスト」に代わる「ウーマニスト」という用語をつくり、彼女の運動を続けている。

話しかわるが、昨年夏から「アメリカ文学における土地」という問題

を考える機会があった。

日本ではこの数年間、土地問題でわきかえっている。「地上げ」「投機」さらには「土地保有税」と、話の種は尽きることはない。このような現状に鑑み、アメリカ文学史のなかで「土地問題はどうか」と問いなおしたのが日本アメリカ文学会関西支部大会（二月八日、関西大学一〇〇周年記念会館にて）におけるシンポジウムだった。

人類の歴史は土地争奪の歴史といつても過言ではない。アメリカの歴史もその例外ではなかった。独立当時の、地図の上ではちっぽけに見える一三州が、今日の五〇州からなる合衆国になるには、領土の拡大は「明白な運命」でなければならなかった。シンポジウムでとりあげられた時代は南北戦争直後から一九三〇年代まで。主要作品はマーク・トウェイン、C・D・ウォーナー共著『金メ

ッキ時代』（那須頼雅訳、山口書店）、ハムリン・ガーランドの『本街道』（押谷善一郎訳、大阪教育図書出版）、ウィラ・キャザー『お開拓者よ』（小林健治訳、荒地出版社）、ジョン・スタインベック『怒りのぶどう』（大橋健三郎訳、岩波文庫、大久保康雄訳、新潮文庫、谷口陸男訳、講談社文庫）。講師是那須頼雅氏（同志社大）、押谷善一郎氏（京都府立大）、山本哲氏（和歌山大）と私。

『金メッキ時代』における、たいした値打ちもない「テネシーの土地」をめぐり、一攫千金を狙って渦巻く欲得ずくの争いは、色恋をめぐる怨念とともに、じつに血生臭く、いかにも「人間的」である。世のなか、「賄賂」や「汚職」の種は尽きない。『本街道』の世界はアメリカ中西部で（テレビ「大草原の小さな家」を想起させる）、身を粉にして大地を耕す農夫たちの生きざまが赤裸々

に描かれている。彼らの血と汗の結晶は借金の利子にしかならない。

『お開拓者よ』は勇敢に生き抜く女性の、開拓者の、自然との戦いの物語といえよう。ネブラスカの自然は一見魅力的なようで、じつは厳しく冷酷なのである。

『怒りのぶどう』は三〇年代、大不況の時代を反映した社会意識の強い小説である。本学商学部でも一読を推奨されると聞く。当時のアメリカ社会の実状を知りたければ、この書を読むにかぎる。

いま、日本では「もの」があふれている。なんでも「ある」時代に生まれた人たちは、衣食住すべて「なもの」という、ぎりぎりの状況をどうてい想像しえないであろう。だが、あの豊かなアメリカにも、想像を絶する苛酷な状況があったのだ。文学作品とそれが書かれる社会情勢、歴史的背景をぜひ知ってほしい。

文庫本・釣り三題

森岡孝二

もりおか こうじ
経済学部教員。専攻は経済
理論。

全国大学生協連という団体がある。そこが実施している調査では、年によって多少の違いはあるものの、学生はだいたい一人平均月二・五冊の文庫本を購入しているようだ。二年間では三〇冊、四年間では一二〇冊という勘定になる。しかし、私が接している学生たちをみるとそんなに買っているとは思えない。とすると、これは実際に購入する文庫本の「平均」冊数ではなく、文庫本であれば月にこれくらいは買えるし、買わねば格好がわるいと思う冊数の「平均」を意味するのかもしれない。

私は月に二、三冊は文庫本を買う。だが、収集趣味は持ち合わせていないので、このごろの小説であろうと、社会思想の古典であろうと、ふと目についたものを選ぶ。職業上の必要から求める経済学の専門書を除いて、テーマで探するのは釣りを題材とした小説や随筆ぐらいで、こころ、二ヵ月の間にも作家の書いた釣りの話を三冊ほど読んだ。

その一つは幸田露伴の『幻談・観画談他三篇』（岩波文庫）である。

「幻談」は露伴の最晩年の傑作であるうえに、日本の古今の釣り話の最

高傑作の一つといわれてきた。私もそのことは知らないではなかったが、わざわざ『露伴全集』（岩波書店）をひもとくまでにはいたらず、今度文庫（一九九〇年一月初版）で初めてお目にかかった次第である。

江戸時代の侍はよほど暇をもてあましていたのか、釣りや芝居によく足を運んだという。この作品にでてる侍も非役をいいことにいつも日がな一日釣りをしていた。その侍が神田川の船宿から鯛釣りに出て、ちつとも釣れない日が二日もつづいたある日の夕まづめのことであった。船頭も客の侍も帰るに帰れず場所を変えているうちに、一度だけ大物がきた。が、それもバラしてしまった。で、いよいよ帰ろうとすると、薄暗い水面にツイとではまた引込む蘆あしのような竿のような細い棒……。

この「幻談」は海釣りの話だが、同じ本には「蘆声あしこゑ」という川釣りの

話もある。川釣りといえば、戦後間もないころから岩波新書で出ていた井伏鱒二の『川釣り』が昨年、露伴のものと同後して岩波文庫に収められた。そのなかに「釣魚雑記」という、戦争中に徴用でマレーに行ったときの投網打ちや釣りの思い出を記した小品がある。わずか数頁の随筆だが、井伏小説のひょうひょうとしたユーモラスな味がよくでてゐる。

「釣魚雑記」には、短編の名手のモーパッサンに、釣りを題材にした「あな」という短編があると書かれてゐる。その話というのはこうだ。

釣りずきの男が自分の取つて置きの釣り場にでかけると、ほかの男が先に来て釣つてゐる。しかも、自分の取つて置きの「あな」を占領して釣りながら、こちらの気にくわなないことをいう。それで逆上して、後ろから相手を川のなかに突き落とす。

このあらずじから、露伴の「蘆声」

という短編の最初の状況設定が「あな」に似ているなと思つた。「蘆声」では、釣りずきの男がいつもの川へ着くと、彼のとつておきの場所に見知らぬ少年が座つてゐる。事情をいってかわつてもらおうとすると、少年は場所をかわりながらも男の身勝手をとがめる。男はむきになる。が、「あな」と似ているのはここまでで、男は少年を川に突き落としたりはしない。それどころか話はいよいよ心あたたまる展開になつていく。

こうして露伴と井伏がつながるともう、モーパッサンを読まないわけにはいかなくなる。彼には「二人の友」という釣りの傑作もあるのだから、なおのことである。

井伏の釣り談義には、師匠の佐藤垢石という有名な鮎釣り名人のことがでてくる。釣りの話には名人もの、秘伝ものが多く、高橋治の『つれ釣れなるままに』（ちくま文庫）には、

彼の直木賞受賞作『秘伝』のモデルとなつた源内という鯛釣り名人が登場する。露伴の「幻談」の釣りは黒鯛だったが、源内の釣りは真鯛である。波止場や川口などの浅場で釣る黒鯛と違い、真鯛は五、六〇メートルもの深場で釣る。その真鯛釣りの竿を片手に四本もつて、二本を置竿して、計六本をからませもせず一人で扱うというのだから、源内がいかなる名人か察するに余りある。

その名人でさえ高橋が挑戦して釣果を競つた日には、お目当ての鯛はさつぱりであつた。どんな名人でも釣れないときがある。露伴も、井伏も、高橋も、面白いのはみな釣れない話である。私たち読者も釣れないのが釣りだという慰めがほしくて釣りの話を読むのかもしれない。

勝てば冠軍？ ——とんでもない

楠 貞義

くすのき さだよし
経済学部教員。
一九四四年大阪府生まれ。
大阪外大でスペイン語を、大阪市大で
経済学を学ぶ。関西大学には助手試験
を経て七一年に採用。八五年スペイン
遊学を契機に目下「現代スペイン経済」
を研究中。

新入生諸君、ご入学おめでとう。

君達の大半にはおそらく陰鬱だった
だろう受験競争から解放されて、こ
の四年間は人生で最も自由な時間が
享受できる。だから、おめでとう。

これからは「教科書」から離れて、
自由に自分の頭で考えられるのだ。

そこで、読書案内を兼ねて、例題を
ふたつ呈示したい。「その一」

頭は人間で胴体がライオンは
スフィンクス。頭はライオンで
胴体が人間は、フセインクス？

という低劣な悪口が、わが国を代表
する新聞（朝日、九一・一・三〇付

夕刊）のコラムに載っていた。だが
このたびの「湾岸戦争」はもつぱら
イラクが悪いのだろうか。そもそも
イラク対クウェートの、悠久の歴史
をもつアラブ世界の内紛——しかも
その史的根源は旧列強諸国のご都合
主義にある——を、地球規模の大戦
争にフレイム・アップしかねない引
き金をひいたのは、誰だったのか。
そして、世界に誇るべき「第九条」
もあらばこそ、好戦的大統領の言う
がままの、みつともない首相を頂い
ている、われわれ日本という国は？
考えてほしい。「正義はひとつ」で

はないのだ。日本の新聞や教科書に
は載らない、知られざる事実や大義
があることを、まず、文末のたとえ
ば①、②、③等から学んでほしい。
例題「その二」

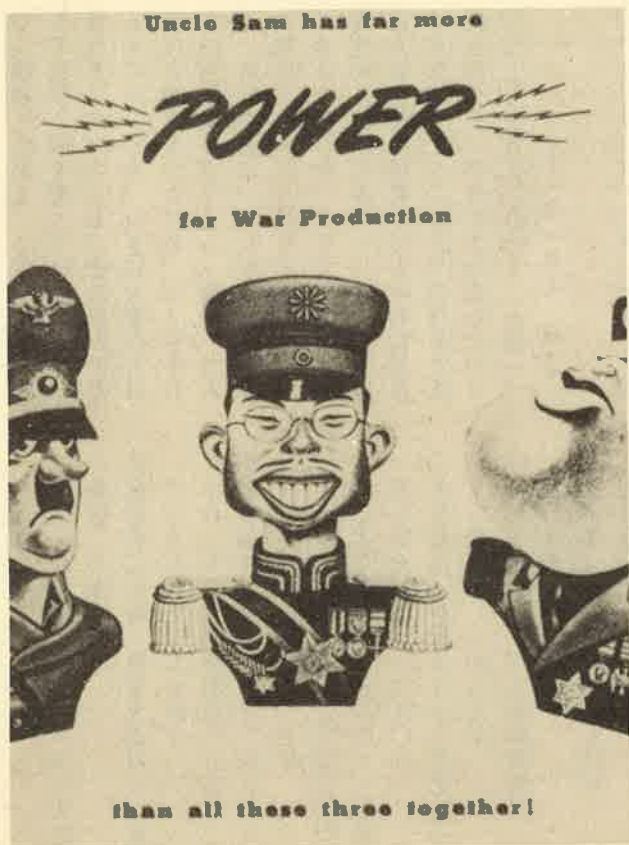
『NOと言える日本』なるベスト
セラーの著者のひとり、南京大虐
殺（一九三七一年二月—翌二月）

〔④⑤をみよ〕の存在そのものにも
NOを唱えている、という。

わが国は明治維新以降、欧米列強
の後塵を拝しつつもアジアで唯一の
帝国主義国に成り上がった〔⑥〕。

だから「明治以降の日本人は、遣唐
使と同じ向学心をもって中国に赴か
なかつた。通信使を迎える姿勢で、
在日朝鮮人を遇してこなかつた」の

だ〔③九三ページ〕。頭は欧米で胴
体がアジアの日本人は、こうして舞
いあがってしまい——最近これに
似た傲慢な言動が特に若者たちの間
で散見される——気がついたら、



八月一五日の敗戦を迎えていた。そしてその教訓として得た「第九条」にしても、われわれがそれを後述のイタリヤ人やドイツ人のように心血を注いで手にしたものではなく「与

えられた」ものであったという理由で、今になって有難迷惑だと喧伝する輩までがいる。その連中にかかれば、第二次大戦の三主役の一人——というのが欧米でもアジアで

も通り相場である——昭和天皇ⅡヒロヒトⅡ元現人神も、いとも簡単に「平和主義者」に祭り上げられてしまう。歴史からきっちりと学ばないことには、「歴史は繰り返す」ことでもって報いそうな気がしてならない。そこで一読をお勧めしたいのが、過去の過ちをみずからの手で修復しようとした、注目すべき事実を教えてくれる⑦と⑧である。これらはわが国と同じ枢軸国だったイタリヤとドイツの人々の、終戦に向けての自発的で命懸けの努力を活写している。

最後に「大学で何を学ぶか」——と言えばダサイのなら——「どうすれば良いレポートが書けるか」を伝授しよう。まず大切なのは、事実——これは一つしかない——を正確に把握すること。その際注意すべきは、捏造された「事実」であり、反省なき「常識」であり、薄っぺら

な「権威」である。これらのインチキを見抜く眼を養つてほしい。書かれたモノについても、それを書いたヒトについても。つぎに大事なものは事実と事実をつなげる、つまりそれらに因果関係をつける「論理」である。自分の頭に、またものによつては胸に、コトンとおちる筋道をたてて考へてほしい。そして、諸事実を論理的に展開できたとして、それは他人に正確に理解してもらわねば意味がない。それにも若干の技術と訓練を要する。類書あまたあるなかで⑨などを参考にされたら、と思う。

——一九一一年一月末 記——

①アミン・マアルーフ（牟田口・新川訳）『アラブが見た十字軍』

リプロポート 一九八六年

②越田稜編著『アジアの教科書に書かれた日本の戦争——東アジア

編・東南アジア編』梨の木舎

一九九〇年

③板垣・荒木編『新アジア学』亜紀書房 一九八七年

④藤原彰『新版 南京大虐殺』岩波ブックレット。なお同ブックレットの「シリーズ昭和史」も見よ。

⑤本多勝一『南京への道』朝日ノンフィクション 一九八七年

⑥W・G・ピーズリー（杉山伸也訳）『日本帝国主義一八九四—一九四五』岩波書店 一九九〇年

⑦木村裕主『ムッソリーニを逮捕せよ』新潮社 一九八九年

⑧小林正文『ヒトラー暗殺計画』中公新書 一九八四年

⑨本多勝一『日本語の作文技術』朝日新聞社 一九八二年

〇先生のことなど 鍛治邦雄

かじくにお
一九四四年生まれ。商学部
教員。国際ビジネス・コー
ス所属。アジア経済論担当。

もうずいぶん昔のことです。私たちが法学部一回生は英語の授業をうけていました。テキストは Joseph Conrad の *The Shadow-Line*。少し難しいところのある英文でしたが、指名された男は淀みなく邦訳をつづけていきました。「ちょっと待って」、〇先生の声がかかりました。「大体いいのですが、どうして *from her keel up* が混じりっけなしのとか生粋のとかという意味になるのですか」。男は暫し無言。次に指名された男は率直に「別の出版社の発行している注釈付きのテキストではそう

なっていました。何故かは解りません」と答えました。「そうですか。ではその次の人」と〇先生。「次の人」、「解りません」という問答が二度度繰り返されて、教室には緊張が高まりました。みんな持参していた辞書を繰って手懸りを探し始め、そのサラサラ、バラバラという音がいに耳に突きましました。やがて、*from top to toe* や *from 5 dollars up* という成句を見つけた男が「龍骨は船のボトムを通っているから、船底から（マストのてっぺんまで）ということになるので、混じりっけなしの、

生粋のという意味になるのでは」と答えました。私たち全員が「なるほど」と思っただけで安心しかけたのですが、〇先生は冷たく「別の考えはありませんか」。結局、*from the birth* から類推して、龍骨が据えられて船の建造が始まって以来ずっと、という意味だと答える男（わがクラスは学部で唯一の男ばかりのクラスでした）が出てきて、一件落着となりました。

〇先生は宿題を出すのが好きでした。夏休みはもちろん、学年末試験が気になる冬休みにも平気で宿題が出ました。あまりのことに代表が何人かで交渉にいくと、「三週間近くもある休みですから、五〇ページ位英文を読んではどうってことないでしょう」、と行ってニコニコしていたそうです。授業のテキストを併せて、年間では軽く二〇〇ページを超えざる量を読むことになりました。

もちろん私たちも対抗手段を採りました。何人かで分担したり、邦訳書を利用したり、でも、クラスの何割かは辞書だけを相手に自力で切り抜くよとむだ骨(??)を折りました。要領の悪いやつと少しばかり他のクラスメートたちから軽蔑されていた彼らでしたが、専門課程へ進んで外国書講読や外国法の授業に出席したとき、原書が読めるねと担当の教師たちから信頼されました。(もつとも信頼されると下調べを欠かせないというつらい面もあります)

Conrad の作品は、本当は小人数でじっくり読みたいね、O 先生は授業中に何度かそう洩らしました。部屋へお茶を喫みにおいで、と誘って、何とかそんな機会をつくろうと努力もされたようです。でも、私たちは乗っていきませんでした。その頃、ようやく盛り上がり始めていた学生運動にクラス中がまきこまれた

していたからです。果てしのない議論を重ねながら、私たちはそれぞれ the Shadow-Line を越えつつあったのかも知れません。読むことより考えること、考えることより行動することが大切に思われたふしぎな時代でした。

わが青春の書、the Shadow-Line を含めて、Joseph Conrad の作品を推薦します。できれば原文をお読みください。みなさんには能力も時間も十分にあるのですから。手始めに読むには、Twixt Land and Sea などがいいと思います。その中の、Freya of the Seven Isles は私の大好きな短編です。

Conrad の文は慣れるまで少し読みづらいところがあります。ほんのちよつと辛抱があるかも知れませんが、おまけに、見られない海事用語が出てきて、通常の辞書で調べてもすつきり解らないことがあります。海事

用語を知るには、佐波宣平『海の英語——イギリス海事用語根源』、(昭和四六年、研究社)を見ていただくといいと思います。用語が全部収録されているわけではありませんが、一つ一つの項目に「生まれつき大好きな文学への情熱」が溢れていて楽しい読みものになっているからです。経済学者が「パンのみにて生くるにあらず」を心から実感しうる人々であることが解っていただけではずです。

(付) Conrad の作品は Penguin Books のペーパーバック版が容易に入手できます。

社会を読む 自分を読む

池島正興

いけじま まさのり
商学部教員。有価証券論を
担当。

大学時代には自由時間がたっぷりある。おそらく人生の中で、これほどの自由時間がある時期は他にはないだろう。でも自由時間を上手に使うのは極めてむづかしい。易きに流れるは人の常。日頃はもっぱらバイトと遊びに精を出し、勉強はと言えば、試験にパスするために試験直前に行くだけということになりかねない。せっかく受験競争から解放されたのに、単に試験にパスするためにだけ勉強するというのでは、その勉強スタイルたるや受験時代と同じということになりかねない。

試験とは余り直接的にリンクさせず、自由時間がたっぷりあるもとでゆったりとした気持ちで、自主的能動的に勉強に励んでもらいたい。少なくとも社会科学を学ぼうとする学生諸君にとって、学ぶことの対象は人間社会Ⅱこの世の中そのものである。

私達は皆幼い頃、「空はどうして青いの?」「どうして赤ちゃんは生まれるの?」と次々に質問をして親を困らせたはずである。その頃の旺盛な好奇心に満ち満ちた目と心を今一度取り戻してほしい。そしてそれ

を、この社会に向けてほしい。私達は社会を構成する単に一個人にすぎない。しかしこの社会との関わりなしには決して生きられない。今自分が生きている社会は一体どのようなものであるのか、いわば、この社会の「ふしぎ発見」の知的探究の旅へ出てほしい。

確かにこの世の中は広い。それに比べて、自分が直接に経験し知りうる世界は狭い。一つの手段として、読書の助けを借りて、他人の経験や知見を共有することで、より広い世界を知ることができるようになる。人間の持つ知識欲からしても、世の中についてよく知るようになることは楽しい。でも、よりよく知るようになることはコワイことでもある。何よりも知らなかったことのコワサに気づく。そしてそれは時には自身生きざまを改めて考えさせられることにもつながる。

佐久間 充 『ああダンプ街道』
(岩波新書) はそのような思いをさせる類の本の一冊である。

都市に林立する高層ビルの建設や埋立てや交通網整備のためなどの大土木工事が膨大なコンクリートを必要とするのは誰しも知るところである。しかし、経済成長や経済開発に伴う大量のコンクリートの需要がダンプ公害をもたらしてきたのを知る人は少ないであろう。

コンクリートの主成分は砂や砂利から成る。砂の大部分は山が切り削られることで供給され、山砂の運搬はダンプが担う。山沿いの5mほどの狭い道を、幅二・五mの巨大なダンプが午前二時頃より疾走し、すれ違い、一日にのべ四千台ものダンプが通る。ダンプ街道の沿道の住民は振動、騒音に苦しめられ、常にダンプが家に飛び込むという恐怖心にさいなまれ、じん肺により健康を破壊

され、ダンプによる痛ましい交通事故故死が現実に出る。これが千葉県君津市で最も典型的に、しかも二十年間以上にわたって続いてきたダンプ公害と言われるものである。

同上書はこのダンプ公害の存在とその実態を明るみに出すとともに、かくも悲惨なダンプ公害がなぜ生み出されてきたのか、また、かくも長きにわたってダンプ公害が放置されてきたのはなぜなのか、その基本的要因を追求している。

戦争により日本経済は壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず、半世紀のうちに奇跡的な成長を遂げ、今や日本は「経済大国」「金満国家」となった。ダンプ公害の分析を通して同上書は、「一体何のための経済成長か? 誰のための経済成長だったのか?」を問うているような気がする。

開発という魔力によって犠牲にさ

れた地域住民の怒りと慟哭に耳を傾けてみると、開発と機械文明の氾濫に身をまかせているわれわれすべてが、その行き方を問われているような気がしてならない」という筆者の言葉に心が痛む。

悲しい話はどうも苦手。オモシロオカシク読みながら、社会のことについて、あれこれ考えさせてくれる本はないのか、という人に勧めたいのが、井上ひさし『吉里吉里人(上・中・下)』新潮文庫。東北の一村落が「吉里吉里国」として独立を宣してから圧殺されるまでを描いたユートピア小説であるが、ユートピア国「吉里吉里国」を通して筆者は、大國日本の社会、その政治・経済の深部に鋭い問いを投げかけている。小説のおもしろさを満喫しながら勉強できる一石二鳥の好著である。

読書を通して、私達は社会を読み、そして自分を読むのかもしれない。

しなやかな明晰さのため に・読書メモ

兩宮 俊彦

あめみや としひこ
社会学部教員。専攻は心理
学・人岡工学。

ここ、二、三年のように国際情勢が日本へも波及しながらおおきくうごいてみると、私のような門外漢でも、無関心ではいられない。とくにこんどの湾岸戦争はショックで、いろいろ考えさせられた。

こんどの事態で、悪いのがフセイソンのことは明らかだ。日本の制裁への参加もしかたない。だけど、過剰で残酷ともいえる武力行使をしながら、正義とか、勝利とかいって喜んでゐる英米などをみていると、複雑な気持ちになってくる。彼らには、植民地支配をし、勝手に国境を

ひいて、石油と交換に武器を売って、時に戦争を煽り、また、イスラエルのパレスチナ侵略を擁護し、中東の混乱の遠因・近因を自分たちがつুক্তたという、やましきはないのだからかと疑った。そして、常に断固支持しかいえない日本政府がなさけなかつた（南方熊楠の、「西欧人は傲慢で、なかなかまいったといわない。対抗するには論理しかない。」という言葉を思った。鶴見和子「南方熊楠」講談社学術文庫）。

また、こんどの戦争は、国際世論をめぐる宣伝戦の側面が顕著だつた。

双方ともに、ステレオタイプ化したイメージを投げつけ、報道をつうじてある視点や立場を誘導しようとしていた。言説が力の関係の一端であることをあらためて感じ、力に歪められた一面的な見方に追従したり、たんなる感情的な反発にとどまりたくもないなと思つた。

以下は、以上のような問題意識をもつた門外漢が、よんで見て、ためになると思つた本の読書メモである。

○市民のための社会科学：日本の社会科学は、ながいあいだ訓古学が中心だつた。最近になって、こうした蓄積にもとづいて効率的かつ学際的に情報収集をし、われわれにとつて切実な問題を追求する人がふえてきたように思う。橋爪大三郎の「冒険としての社会科学」毎日新聞社、「現代思想はいま何を考えればよいのか」勁草書房、猪口邦子の「ポスト覇権システムと日本の選択」築摩

書房などは、こうした仕事の一例である。ともに、日本人が国際社会に対応し、日本社会が成熟していくためには、知的言語の訓練と社会科学の発展とが必要だという認識で共通している。そして、これに対応するように文章も明快で非常にわかりやすい。

○普遍性をめざす文明論：自然科学の周辺では、もつと前から、単なる西欧学芸の消化をこえた射程のおおきな仕事がなされてきた。科学史の伊藤俊太郎（「比較文明と日本」中央公論社、「都市と古代文明の成立」講談社など）や文化人類学の梅棹忠夫（「文明の生態史観」中公文庫など）が、その例である。ともに、科学的基盤にたつて、西欧中心でない、真に普遍的な文明の学をめざした仕事として貴重だと思う。

○メッセージの解説：イーグルトンの「文学とは何か」岩波書店に展望

されているように、近年、文芸批評は理論的發展をとげ、文学にかぎらず、あらゆるメッセージをテキスト間の関連と社会的文脈のなかで解説する方法を提供しつつある（文芸の領域ではバフォーチンが先駆的な仕事をした）。ウイリアムズンの「広告の記号論」柘植書房、サイードの「オリエンタリズム」平凡社、「イスマム報道」みず書房などは、こうした解説の成果である。これらをよんだあとでは、広告や国民性についての議論、報道などを、そこにこめられた社会的文脈やイデオロギーと一緒に、無自覚にのみこむことはできなくなる。おそらく、こうした種々の文脈や視点への敏感さは、社会的強者の論理とは無縁のものだと思う。バフォーチンやサイードをよむと、様々な立場や考えを考慮しながら展開される議論のしなやかな明晰さに出られる。これは、彼らの博識や頭の

よさだけではなく、シベリア流刑やパレスチナ人といった社会的弱者としての立場とも関連していると思う。○簡潔・明快な日本語のために：以前、文芸批評家の小林秀雄が対談で、「日本人は論理が苦手なんだよワッハッハッ」とか言っているのを読んで不快になったことがある。彼の文章は、論証をはぶいて、そんなことあるまいとか、気迫でごまかすことがおおい。言葉の呪術作用や、雰囲気でごまかす人もおおい。文章読本の類のおおくも、含蓄が大切ですとか言っている。私は、こうした日本語にたいする態度はあらため、簡潔・明快な日本語をかくための基礎訓練が共有される必要があると思う。こうした、方向をめざした本として、木下是雄の「理科系の作文技術」中公新書、「レポートの組み立て方」ちくまライブラリー、本多勝一の「日本語の作文技術」朝日文庫

などが、有益である。

専門書を読むために

大石 裕

おおいし ゆたか

社会学部教員

専攻はマス・コミュニケーション

シヨン論、政治社会学。

読書は確かにしんどい作業である。僕もそう思う。そこで、(いわゆる趣味本とは異なる) 専門書・研究書を読むという本格的読書に向かっての準備作業について、段階を追ってお話ししてみようと思う。

先ず、テレビのニュースを定期的に見ること。ニュース戦争花盛りの昨今、見る番組には事欠かない。次にそこで得た情報をもとに、翌日新聞を読むこと。社会面やスポーツ面だけでなく、政治・経済・国際面にも目を通すこと。全ての記事を読む

必要など無論ない。囲いのコラムだけでなくもいいから、とにかくこの手の記事を読む習慣をつけること。これが第一段階である。

次に週刊誌の定期購読を始めること。新聞社系、出版社系いずれの週刊誌でもよい。一誌でいいからそれを読み、テレビや新聞から得た情報の量を内幕話を含めふやしてみること。これによって「事情通」に一步步づく。ただし週刊誌の記事は憶測が多いから十分に気をつけること。これが第二段階である。

第三段階、ここからはちよつと大変になるかもしれないが、月刊誌に挑戦してみることに。とりあえずは『月刊Asahi』、『文芸春秋』あたりがおすすぬか。『中央公論』、『世界』に到達したら申し分なし。月刊誌は図書館にふんだんに置いてある。毎月購入する必要はない。気に入った特集が掲載されているものだけを買えばよい。もちろん、コピーして読んでも構いはしない。『中央公論』や『世界』が読みこなせるようになれば、論理的思考はかなり身につくはずである。

第四段階になると道は二つに別れる。自分が興味・関心をもった社会問題について書かれた本を読み進めていくのが一つ。もう一つは、そうした問題を分析する方法について書いてある本を読むことである。前者について言えば、先ずはノンフィクション作家の作品を読むのが最も手

つとり早い方法であろう。こうした類の本は馴染み易く、文章もわかりやすい。ハラハラドキドキしながらページをくくれるので、読むのにそれほど労力はいらないはずである。

日本のメジャーな作家の中では、立花隆、柳田邦男、沢木耕太郎、鎌田慧、落合信彦（この人はフィクションも混ざっているが）あたりをマークしておく面白い。執拗なまでに現地に足を運び取材を進める彼らの姿勢から、多くのことが学び取れるはずである。彼らが扱うテーマは実に多岐に渡っているが、綿密な取材によって数多くの事柄がまさに「実証」されている。

後者については、授業で使用される教科書も含め、自分が関心をもった分野の教科書を探し出して読むことをすすめたい。できたら共著のものの方がよい。どの分野についてもいやになるほど教科書は出版され

ている。それを丸ごと一冊読む必要はない。そのなかの一章でいいからサプノートをとりながら、とりあえず熟読してみる。長いものでもせいぜい四〇〜五〇ページであろう。大

学生向けのテキストという触れ込みで書かれた本がよく理解できなくても嘆くことはない。この場合、わからないのは読者の責任ではない。執筆者が悪いのだ。その時は、また別の教科書を手に入れればすむことだ。一章でも読み終えることができたなら、次に他の教科書で同じようなことについて書いてある章を読んでみよう。読むスピードが速くなっているはずだ。最低三冊、こうした読み方で教科書を読むと、難解なキーワードが少しずつわかってくるに違いない。そうすればしめたものだ。その用語と概念を使って、現実を切り刻めるはずだ。以上が第四、第五段階である。どちらが先に来ても構わない。

これらの段階が終われば、専門書・研究書を読むための準備段階は終了ということになる。

これから先は、ゼミに入るなり、授業にきちんと出席するなりして、各自が気に入った教員を大いに利用することだ。そして、専門書・研究書に触れる機会を少しでもふやし、それを読みこなすことだ。学生諸君の健闘を祈る。

「どこでもドア」を開く 楽しみ

馬場昌子

ばば まさこ
工学部教員 専攻は、住居
計画学、建築計画学

小2の娘が読んでいる「どらえもんのおしぎ探検」の中に「どこでもドア」がでてくる。このドアをくぐると、瞬時にいろんな場所、時代にワープできるのである。おもしろそうに読んでいる娘をみていて、我が関大にも素敵な「どこでもドア」があることを自慢したくなってきた。

そう、図書館であり書籍です。表紙を開けば、その本の世界にすぐにワープできる。

以前、仕事で、明治時代に日本を訪れた外国人の紀行文などを数冊読んだことがある。もっぱら日本家屋

に対する記述、特に台所空間の使われ方・諸設備・道具の観察を追ったのだが、中には、旅行記としておもしろくて、つい読み耽ってしまい困ったものもあつた。

長い鎖国の時代から開国。政府に招へいされた御雇外国人ばかりでなく、世界各地から旅行者が訪れた。

彼らの日本滞在記や旅行記などに当時の日本の様子が克明に描写されているものも少なくない。疑うなら、図書館にいつて実際にあなたの好きな「ドア」を開いてみるとよい。

例えば、エドワード・S・モース

たとえば、大森貝塚発見という受験わががすぐに飛びだすであろうが、彼の著書の中に何冊も明治の日本について記したものがあつたことを発見するだろう。今からはんの百年ほど前のわが国の様子に、外国人が経験し驚いたと同じような気持ちになること請合である。

ここに紹介するイザベラ・バードの「日本奥地紀行」(東洋文庫240平凡社 一、九〇〇円)もそんな本の一冊である。この本によって、私は、明治時代にワープし、白人女性に変身して、東北・北海道を一人旅したのである。

イザベラは、当時47歳、イギリス生まれで、明治10年6月から9月にかけて、通訳兼従者の日本人一人を雇って旅行をしたのである。百年も前に、この歳で、白人女性が、未知の土地、それも日本の中でも後進地域である東北・北海道の農村地域を、

しかも一人で旅をしたと思うだけで、私などはワクワクしてしまふ。

イザベラは旅そのものが目的である。訪問地の様子を妹や友人に手紙を書くというかたちで紀行文は進む。どのような装備・姿で旅行したのかは、読んでのお楽しみ。

当時外国人は、国内を自由に旅行できなかった。だから、訪問地の多くで、白人女性を初めてみるという沈黙の群衆に、昼夜構わずじつとみつめられる。想像するだけでむずむずしてくる。人々は親切で、途中危害を加えられることもなく、無事に旅行は終わる。

はなしの大半は、悪路・しつけの悪い馬・悪天候と悪戦苦闘する旅行のようすと、各地で見聞した美しい自然や貧しい農村のようすである。

電気、水道、ガスなどといったものは、ほとんど普及していない。日本人は、入浴好きで毎日お風呂に入

らないと気が済まないなどということは、この本を読むかぎり、あてはまらない。皮膚病が蔓延し、非衛生な環境で人々は暮している。日頃なげなく日本人固有の生活習慣や国民性として語られていることも、例えば百年前まで遡ると、そうではないということ、この本に登場する日本人の生活ぶりがまるで現在と違ふということを知ることができる。

近頃は、朝シャンやシャワー浴まで、特に若者の間ではやっているとらしい。生活様式などというのは、短い期間に急激に変わってしまうものなのかもしれないなど、ついつい住居計画という自分の専門からめて、とりとめの無いことまで考えてしまった。読書が都合良いことには、テレビや映画のようにビジュアルで送り手の決めた時間の流れに左右されるのではなくて、活字の奥にあるものに想像力を巡らせ、自分の

都合で読み進んで行けることである。一行に一時時間費やしたつて構わない。これからの大学での勉強の楽しみの中に、読書による追体験を加えて頂きたい。

特に、建築設計を志したものに必要とされる能力の一つに、先の「想像力を巡らせる」ということがある。全く無の状態から一つの空間を創造するのだから、完成した空間に立つた人が、どう感じ、どう行動するのかが、設計段階で十分把握する必要がある。そして、一旦建ったからには、一定の時の流れに耐えられるものでなければならぬ。人をどれだけ洞察でき、人と物・空間の絡みをどれだけ読めるのかという大いなる想像力が要求される。その為にも、想像力を巡らせながらの読書を多いに楽しんで頂きたいのである。「どこでもドア」を開くのはあなただです。

著者・台所のはなし

(鹿島出版、共著、一九八六年)

・老人とすまゐ

(中央法規出版、共著、一九

八八年)

・新版マンション管理を問う
(都市文化社、共著、一九八

九年)

〈文章〉ことはじめ

鉄川 精

てつかわ ただし

工学部教員。一般教育科目生物学

生物学概論など担当。専門は湖沼

人工湖のプランクトン、河川の底

生生物などの陸水生態学的研究。

『淀川—自然と歴史—』(一九七

六年)がある。

本誌編集委員会から新人生を対象

とした読書案内の原稿依頼があり、

どう考えても私は適任とは思えない

のだが、心苦しくもお受けすること

にした。何分にも野外での調査に研

究材料の収集さらに室内での実験す

べてを一人で行うので、時間に追い

かけられ読書に費やす余裕がない。

こんなことで読書案内なんて実にお

こがましい限りである。

かつて紅顔の美少年であった頃、

父親の書棚に並んでいた世界名作全

集や日本文学全集から適当に引きぬ

いて、暇な折りに読みだしたが読

書ははじめであったと思う。特定の著

者の作品というのではなく全く手あ

たり次第の乱読であった。古典落語

集にまで手を出したのが思い出され

る。しまいに悪友数人と同人雑誌

までつくる凝りようで大学一年生の

ころまで乱読が続いた。今は乱読と
いうよりも積ん読に変身し、家では
読まない本を積んどくばかりでと言
われるような仕儀と相成る。

今にして思えば乱読もそれなりの
効用はあった。文芸評論家や批評家
になる訳でなし、いろいろな著者の
作品に接することにより、人の生き
方とか考え方などは勿論のことであ
るが、文章の構成、文の運び、表現
のしかた、言葉のつかい方などにつ
いて大いに勉強になった。

大学で長年にわたり教育に携わっ
てきた者として、判読しにくい字で
書かれた当て字と誤字の多い答案や
レポートに泣かされることもある。
創造性豊かというか発想のすばらし
い当て字に苦笑させられる。人口衛
生、人口湖、公害、純還、保然に
感心をもち、などいろいろ工夫して
いる。これはほんの少しの例である。
正しくは、人工衛星、人工湖、公

害、循環、保全に関心をもち、と書くべきである。私はいつも辞書を傍らにおき原稿を書いている。同義語や類語ではどれが適切か、送り仮名は正しいか、などを確認するためであり、できるだけ誤りをなくしたいと心がけている。

答案のなかに必ず「すいません」で始まる言い訳を書いているのが見られる。なぜ正しく「すみません」とか「申し訳ございません」と書けないのでしょうかね。文章づくりの苦手な私から、世にいう名作の多読と乱読の楽しみに加えて辞書の効用を、ぜひ諸君におすすめてほしい。

さて、これからの大学生活でレポートを書く機会も多くなると思われる。読み手にわかりやすく簡潔に文章を要領よく書くのが苦手な人に、つぎの図書をおすすめてほしい。

工学部の学生諸君には、学習院大
学名誉教授（物理学）木下是雄著の

「理科系の作文技術」中公新書を紹

介しよう。独自の発想とロゲルギス

ト同人で知られる著者が、理科系研

究者、工学系技術者、学生のため、

レポートや論文だけではなく説明書

などの書き方、学会講演のコツにい

たるまで具体的な例をあげて述べて

いる。文章の立案、組み立て、構造

と流れ、簡潔な表現などについて、

従来の文章読本には見られなかった

創意あふれる指導書である。文科系

の人たちにも大いに参考になる。

さらに特別研究や学会発表のため

には、元東北大学教授（生化学）の

富田軍二著「科学論文のまとめ方と

書き方」朝倉書店をすすめてほしい。研

究成果をまとめるための注意から始

まり、データの処理と表現、構成、

日本語と欧語論文の文章論、文献、

図表や写真の扱いと注意、校正など

例をあげ細心の注意と工夫により、

て詳述されている。

文科系の学生諸君には、先に紹介

した「理科系の作文技術」の著者が

文科系学生と社会人を対象に、多く

の材料を集め例文をあげながら、レ

ポートを組み立てていく方法につい

て、具体的に研究し章末に問題を用

意してある実践的な指導書がある。

それは木下是雄著「レポートの組み

立て方」筑摩書房である。

このほかに、早稲田大学教授の篠

田義明著「書き方の技術」ごま書房

ゴマセレクトをあげておこう。

いい論文を書くのはむずかしい。

大学を終えるときには、きちんとし

た文章で内容の充実した卒業論文を

書きあげられるよう希望したい。

■特集■「在日朝鮮・韓国人問題」を問う



PART II

今回、前々号の第93号に続き、在日朝鮮・韓国人問題の特集の第2弾として、文学部教員の吉田永宏氏に出筆していただいた。第93号の特集では、龍谷大学の金東勲氏に「日本の外国人管理行政と韓国・朝鮮人」について、本学文学部の山本冬彦氏に「在日外国人と年金制度」という制度的な面について出筆いただいた。

そこでこの第95号については、「在日朝鮮人文学」論の前提」ということで、在日朝鮮人が日本語で文学をおこなうことの意味等を中心に出筆していただくことにした。在日朝鮮人文学の問題については、編集部内でもこのかん特に議論の的となっており、「書評」誌において特集できたことに非常によろこびを感じているところである。ここ関西大学の一般教養科目の総合コースで、「日本の中の朝鮮文化」というかたちで取り上げられたことも注目し値するところである。

在日朝鮮人文学の主要な問題点としては、過去の日本の朝鮮半島に対する侵略、その中でなされた創氏改名、日本語の強要など、侵略の道具として使われた日本語で文学をおこなうことをめぐる状況にあらう。日本人は日頃当然のごとく使っている日本語についての歴史的な問い直しを始めていくことが必要である。

特集●「在日朝鮮・韓国人問題」を問う

〈在日朝鮮人文学〉論の前提

吉田 永 宏

はじめに

在日朝鮮人の手になる文学は、日本文学でないことはむろんのこと、朝鮮文学でもない。日本人の側からも、在日朝鮮人の側からも、様ざまの異論のあることは承知しているが、わたしはさし当たってそれが〈在日朝鮮人文学〉としか呼びようのないまさに特殊性を本質的に内を持った文学であることをまず明らかにする必要があると考えている。そして念のために断わっておかねばならないが、わたしの言う特殊性というのは決してマイナスの要因を意味するものではなく、逆にプラスのベクトル

を持つものとしての特殊性なのである。この小論の意図するところもそこにある。

それを日本文学と呼んだり、或いは日本文学と同一視したりしてはならないということの理由の一つは、日本人の側から言えば、それが自らの朝鮮（大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の両方を指していることむろんである）に対する責任を曖昧にしてしまう故にでもある。戦後（朝鮮にとっては解放後を意味する）の現在に至って、かつての文学版内鮮一体化に相通じるかの如き（日本文学）化・（日本文学）視することは厳に戒しめねばならないというのが、在日朝鮮人文学に立ち向かう際のわた

しの自戒的思想的立場である。特殊性そのものの本質は、論者の視点・立場の如何にかかわらず歴史的条件によって根源的に内在するものであることはむろんであるが、日本人が無意識のうちにもせよ、文学の同化に手を貸してはならないということを確認しておきたいのである。

(1)

在日朝鮮人文学をその形態の上からのみ定義すれば、①日本に半永久的に居住し（或いは、日本に生まれ、育ち、生活する）、日本語を日常語とする在日朝鮮人が、②日本人を主たる読者対象として、③日本語によって表現した「文学」ということになる。内容の持つ意味を別として形の上から見ただけでも、これは矢張り特殊なものである。フランスとアルジェリアといったかつての植民地の関係にあった場合に類似のものが存在しようが、例えば在米日系人文学などは異質なものである。

近代にはいつての日本と朝鮮との歴史的条件によって形成された在日朝鮮人文学のこの特殊性を確認することから始めねばならない。在日朝鮮人作家たちは当然のことながら朝鮮を祖国とし、そこに国籍を有する、朝鮮人作家である。例えば前掲の日系米人などはその点が異なる。決定的なことは、これらの作家たちが日本人社会

で生活し、日本語で芸術活動を行なっているという事実の有する、歴史によって強いられた特殊性である。朝鮮人作家が何故日本に住んでいて、何故日本語で表現するのか、全てがそこから出発する。

李恢成が金史良について書いた「作家は生きつづける」〔文芸 七一年五月〕という短いエッセイの冒頭に「自分は何者なのか、お前はなぜそこにいるのか、としばしば質問を発することがある」と記したことに触れて、伊藤成彦は、「（自分は何者なのか、お前はなぜそこにいるのか）という問いは、それ自体としては、何も特別な問いではない。およそ自意識をもった存在である人間の、意識のアルファでありオメガであった、とくに想像的意識を言語を介して対象化する作家にとっては、意識が想像の翼にのって飛び立ち、また回帰する、意識の原点でもある」と断わった上で、その意識の原点について次のように述べている。

しかし、この問いが、ほかならぬ李恢成から発せられるとき、この問いは、特別な意味をもつ。少なくとも私にとっては、特別の意味をもって迫ってくる。戦前、三六年間にわたって、日本帝国が朝鮮半島と朝鮮民族の上に刻んだ抑圧の歴史、それと分ちがたく結びついた李恢成一家の履歴、現在の南北へ

の分断と、この分断に利を求める日本政府の政策、

また、「朝鮮人が日本語を話す」ということは、思想

交流の手段として一つの外国語をマスターしている

という技術的な問題に解消しえないなにかをもつて

いる。それは朝鮮人が日本語を話すにいたった事情

が、帝国主義と植民地、圧迫と被圧迫という関係か

ら切りはなしては考えられないからである」と歴史

家の朴慶植がその著書『朝鮮人強制連行の記録』の

序文冒頭でまず言わずにはいられない、その日本語

をもつて創作活動をする、せざるをえぬ在日朝鮮人

作家たち——これら日朝関係史の過去と現在、そ

のふくむさまざまな事件、事情のたぎりたつ熱い坩

堝の中から、浮び上り、発せられた問いとして迫っ

てくるように、私には思われるのである」(『告発と

救済——在日朝鮮人文学とわれわれ——」季刊

『文学的立場』七号・七二年七月)。

伊藤成彦のこの認識は二十年近い以前のものとしては、

やや突出した観のあるものであるが、今日、在日朝鮮人

問題を論ずるに当たっては言わば必須条件としての認識

であり、共通のものとなりつつあるその一例としてわた

しは挙げているに過ぎない。そして在日朝鮮人文学を論

ずるに当たってもこの認識は必須条件であり固有の前提

であることをわたしはまず強調しておきたいのである。

(2)

かつては、最も真摯に在日朝鮮人問題と向き合ってい

る人たち(在日朝鮮人の生活と向き合い、その文学を受

け止め、それを評価しようとする人たち)の間にすら認

識の混乱があつた。例えば伊藤成彦の指摘しているよう

に、山田道人は「李恢成文学の可能性」(『民主文学』七

二年四月)の中で、「李恢成の文学は、在日朝鮮人の文

学として優れていると同時に、現代日本の文学作品とし

て(日本語で書かれている限り当然のことなのだが)優

れている」と書いたし、小田実が李恢成との対談「文学

者と祖国」(『群像』七二年五月)の中で、「在日朝鮮人

の文学を日本文学としてではなく、アジア文学のひとつ

として見たほうがいいんじゃないかということを考え出

したんです。つまりこれは韓国の文学にも還元できない

し、共和国の文学にも還元できないし、日本文学にも還

元できないし、何ものが別のものとしてやっぱり存在

し得るんじゃないか、していいんじゃないかという気が

するんですよ」と発言したのも、やはり混乱の一例であ

つた。それはちょうど日本人の真面目な教師が、自らの

担当するクラスに存籍する在日朝鮮人生徒を日本人生徒



と分け隔てすまいと努力するの余り、朝鮮人生徒を完全に日本人生徒として対応し、しかもその教育活動を正しい人権教育と信じて疑わなかった善意の真摯さとまさに表裏一体、同根のものであったと言つてよい。さらにまた、これも伊藤成彦の取り上げている飯沼二郎・鶴見俊輔の対談「朝鮮人と日本語をめぐる二人の日本人の対話」(『朝鮮人』七二年三月)に於ける、「呉林俊さんとか金達寿さんとか、そういう在日朝鮮人が日本語で書く文学の問題ですがね。ぼくは在日朝鮮人が日本語で書く文学というものは、はっきりと日本文学であるといいきつた方がいいと思うんですよ」との飯沼二郎の発言や、ポランド生まれのコンラッドやスペイン生まれのサンタヤナが優れた英語の文体を創造する作家となつた例を挙げつつ鶴見俊輔が、在日朝鮮人作家たちが一方に朝鮮語を持ちながら日本語で書くならば「新しい日本語を作るという可能性」が「朝鮮人に対して支配者のような態度でのぞんだ日本人よりも、さらに誇り高い日本語を造型する可能性がある」と語っていることなども、対談者が共に一貫して在日朝鮮人問題に真摯に積極的に取り組んできた人であるだけに、矢張り混乱があつたとしか言いようがない。在日朝鮮人作家たちの手になる作品の質的レベルをわれわれがどのように評価するかといった問題や、

それらの作品を日本人がどのように受け止め、また、日本人の現代の作家たちの表現行為にそれらがどのように相互に共鳴するのかわかっていた問題とは自ずから異なつた、前提の事柄であるとわたしは考える。在日朝鮮人作家たちの表現行為は固有の、日本人とは別の世界の作品であるとの理由で、われわれがそれに対して甘い評価で臨んだり、或いは評価不能、批評不能といった態度で臨んだりする筈はむしろ有り得ないことである。

(3)

自著「(在日)」という根拠——李恢成・金石範・金鶴泳(国文社・八三年一月刊)の「あとがき」に竹田青嗣(姜修次)が、「(民族)とは何かという問いは、日本人が(人間)や(生き方)や(社会)を問うのと同様に、(在日)にとつて不可避的な問いであるというほかない」とわざわざ書かねばならなかつたことも無視できない。川村湊「(在日)作家と日本文学——その課題と現在——」(『講座昭和文学史』第五巻・有精堂)によつて李良枝、李起昇、つかこうへい(金峰雄)らと共に「民族的アイデンティティの問題を放棄したのに等しい第三世代」と位置づけられた竹田青嗣にとつても、「(民族)問題は当然の如く「不可避」の問題なのである。川村湊の



整理によれば、「(在日)」の第三世代に於いてはその第一世代「(餓飢道)」の張赫宙、「光の中に」の金史良ら)や第二世代(李恢成、金石範、金鶴泳ら)に於けるような「日本語」との葛藤はほぼ解消されていることと、この世代の在日朝鮮人の内部に於いても大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国のいずれも実質的に「外国」と変わらな

のために第三世代になる在日朝鮮人文学は多様性から拡散に向かう方向性に於いて、より個々人の問題性の中に強く収斂されて行き、枠組みとしての《在日》文学という括り方を必要としない傾向にあると展望している。

「在日朝鮮人文学は『日本文学』に同化、解消してゆくといわざるをえない。少なくとも、それを《在日》文学として括ることは、早急に意味をもたなくなると思われる」との川村湊の推測通りに推移するのかどうか、わたしは容易に首肯し難いが、それはこの世代の竹田青嗣でさえ（敢て、さえと言う）前掲の如き自己の存在理由を確認せざるを得ない属性を有しているが故である。

「竹田青嗣」という日本人風のペンネームが、太宰治の小説の題名（「竹青」）からの借用であるとの由来を語りながら、竹田青嗣は前出「あとがき」で所謂「本名問題」に触れている。文章を書き始めた頃、《在日》の知人や日本人たちからも、君は在日朝鮮人二世なのに何故本名を使わずに日本名を名乗るのかとよく聞かれ、それに対して、「当時私のまわりでは、在日朝鮮人たるものは本名を名乗らなくてはまともな人間とはいえない、というような雰囲気の色濃くあった。私はそういう言説に強く反撥して、いわば肩肘を張るつもりで竹田青嗣という日本名のペンネームを使ったのである。その頃の私の

考えでは、本名を名乗ることは自分の本来的な自己認知にとつて一つの蓋然的な要素にすぎないのに、あの言説では、それが逆転されて、本名を名乗ることこそ、真の主体性へ至るための唯一無二の絶対条件であるという具合になるからけしからぬ」（傍点ママ）との返答を常に用意していたという。本名問題についての以前の自分の態度について正直にそう述懐した上で、竹田青嗣は更

にその後の自分の考えの変化を次のように説明している。しかし、今では、私はむしろ本名を名乗ることにそれなりの意味があるのだと考えている。そのことに籠められている《在日》の様々な意味を、かなり諒解できるつもりでいる（ただし、あの言説が、表立った《言説》の世界から離れ静かに自分なりに生きたいと考えている人々を心理的に威嚇しないかぎりにおいてだが）。このペンネームのおかげで、私はある方面では、知り合うひとごとと自分が在日二世であることを説明しなければならず、それもかなりわずらわしく不便なことだということが判つてきた。だから今は別に、日本名のペンネームに思想的に執着しているわけではない。だが、もともと《在日》は、名前を幾つも持ったり、韓国人、朝鮮人という呼称で苦勞したり、ひとの北と南の所属をうか

がい合ったりしなければならぬといった「わずらわしさ」を抱え込んで生きている存在である。そう考えてみれば、ことさらあのペンネームに由来する「わずらわしさ」だけを避けねばならぬ理由もないように思える。むしろそれが、私にとつての、(在日)性のステイグマであると考えられないこともないからである(傍点ママ)。

竹田青嗣自身は右の説明について「結局は弁解のように聞こえてしまうかも知れない」と断わっているが、日本人の読み手としては、書き手である在日朝鮮人の奥深い心情の部分論理や観念のメスで裁断することは到底不可能に近いことである。それよりもわたしにとつては、第三世代の文学者である竹田青嗣をとらえて離さない「わずらわしさ」の重さを正確に計量することの方が重要である。「わずらわしさ」に縛られるのではなく、「わずらわしさ」を自らの手に把握したとき竹田青嗣は在日朝鮮人作家なのであり、それ以外の何ものでもないのである。些か迂回したかも知れないが、「日本語で生活し、自己表現する朝鮮人が、もっとも苦しみを味わうのは、まさに朝鮮人としての自己に覚醒しようとした、その瞬間ではないだろうか。本来朝鮮人であるにもかかわらず、その民族性を獲得するときに、もっとも苦しみを味わわざ

るをえないときでもあるという、日本語作家(あるいは生活者)の特有の体験と、わたしは結びつきうるのか(磯貝治良「在日朝鮮人文学」の地平——金石範・高史明・李恢成)という、日本文学者の側の主体の位置の確認と、磯貝治良の言う「日本語作家」としての在日朝鮮人の文学の固有の問題を日本文学一般の中に解消してはならないことを主張しておきたいのである。

(4)

磯貝治良は前出「在日朝鮮人文学」の地平——金石範・高史明・李恢成」の冒頭で、「十字架」という比喩を用いるなら、在日朝鮮人の日本語作家ほど、ことばの十字架を背負った人びとはほかにいないだろう」と記した上で、「在日朝鮮人作家にとつて日本語は抑圧者のことばである。その日本語で小説を書き、自己表現をする在日朝鮮人作家の感覚的なこだわりや思想的屈折は、わたしにはとうてい追体験することのできないものである。わたしはこの小文を書く動機は、まさに追体験の困難を自分にはつきりと確認させ、安易な共存感を一度払いのけてみる一つであり、もう一つは、そのような消極的な動機とは逆に、在日朝鮮人の日本語作家が呪縛から自由へ到ろうとして、いま格闘している思想の営みが、



文学を考える場合にわたしにすぐれた示唆を与えるからである」と自らの日本人としての覚悟の程を披瀝している。「在日朝鮮人の日本語作家」と真摯な日本文学者ととは合わせ鏡となる他はないのであるが、ここで言われている「ことばの呪縛」の問題について、残された紙数で触れておきたい。

在日朝鮮人作家が日本語（その作家にとっては本来外

国語であるところの）で表現することの本質的意味を、最も鋭く問い続けているのは金石範である。金石範にとって日本語とは、まず何よりも（過去の支配者のことば）である。「在日朝鮮人作家が、祖国のことばによらずに、母国語によらずに、日本語で」書くということは、「過去に、僕らは朝鮮語を抹殺された歴史がある」だけに「非常に心情的に、いたたまれない、やっぱり痛恨の情」があり、「在日朝鮮人作家が、日本語で小説を書くということ、これは当然矛盾がある」（『座談会』日本語で書くことについて）『文学』七一年一月）との認識から出発せざるを得ない。そこから、「朝鮮人問題とか、いろんな問題をやっぱり、日本人とか日本の中に浸透」させるということが課題となり、さらに、「在日朝鮮人が日本で書く場合に、日本語のワクの中で、朝鮮人としての自由があり得るかどうか」が在日朝鮮人作家自身に問われ、その上で、「日本語というメカニズムの中で、日本人も朝鮮人もいっしょくたに還元されてしまふんじゃないで、日本語で書けばこそ、最後まで、朝鮮人としての主体を貫いて、しかも日本語のワクの中で、自由というものを獲得する方法があるのか、ないのか（傍点引用者）（『同』）」という大きな作家主体の問題と直面することになる。「外国語といっても日本語以外のことは

——アメリカへ行つて英語で書いてる朝鮮の作家もいるわけですが——日本語以外のことばで書く場合だつたら日本語で書く場合の痛恨の念というか、そういうものはほとんど起ることはないと思うわけです。なぜかというのと、日本と朝鮮との歴史的な不幸な関係、事実があるわけです。つまり過去の支配者、抑圧者のことばで自己表現をしなきゃいけないという立場にある在日朝鮮人作家たち（『在日朝鮮人文学』について、『新日本文学』七四年七月）という発言は、日本語の本質をどのように認識するかという問題意識に支えられてのものである。

日本が過去に於いて朝鮮人から朝鮮語を奪つたのは紛れもない事実であり、金石範はそれを日本語の「倫理的な側面」と呼び、「朝鮮人としての存在を抹殺するために使われた日本語でもって朝鮮人が自己表現をしなきゃいけない」（「同」と言う。自らを拘束し抑圧するその言語で今度は自身を解放するという新たな関係を創出するのである。「一言でいえば、在日朝鮮人文学は日本の植民地支配の所産である」（『在日朝鮮人文学』、『岩波講座文学』第八巻「表現の方法」七六年八月）と金石範は規定し、その植民地性について、「かつての時代に、敵の言語——おのれの存在を抹殺する者の言語で文学がなされたというところにその植民地性がはじまる」

（「同」と付加的に説明している。従つて金石範にとつて在日朝鮮人文学とは、当然のことながら日本帝国主義の政策の産物であり、過去に於いて日本が朝鮮を支配し植民地政策を行なつたその落とし子とも呼ぶべき性質のものである。日本の敗戦（朝鮮にとっては解放）以前からの在日朝鮮人の形成と（在日朝鮮人文学」とを切り離して考えることのできない所以である。金石範の（ことばの呪縛）なる概念について、少し長くなるが次の二つの文を引いておこう。

確かに虚構というものはことばによつて支えられているけれども、虚構が成立した瞬間に虚構の世界というものはことば自身を超えるものだ——ことばに支えられながらことばを超越する。日本語に虚構が支えられながら、虚構の世界・文学の世界というものは日本語を超えて行つていく。完全なフィクションが成立すればするほど、イメージの世界というのはことばを超えていく——こういう関係があるのではないか。ことば、日本語がもっている個別的な肌合いをとおつて、その日本語がもっている普遍的な側面が開かれる。想像力そのものが一つのイメージを喚起することにおいて普遍性をもつ、しかもことばそのものには個別性を超越する普遍的な側面



があるんじゃないかと思うわけです。日本語の個性をとおしてしかも日本語に内在する普遍性をひき出す——その日本語の中にある普遍性を通じて日本語の束縛を解放していくことができるんじゃないか。

（『在日朝鮮人文学』について）

このようにして朝鮮人作家としての主体的意識が揺るぎなく形成されるならば、日本語のメカニズムの侵食性に耐え、これを自分のものとして食ってし

まうことができるだろう。（略）つまり日本語で書くにも拘わらず、その朝鮮人としての作家的主体の確立によって、その作品に独自性を与えるにおいての言語上の障害は取りのぞかれるということだ。これらのことは自体に内在する普遍的作用をそれとかかわる作家的主体との緊張関係が想像力によって大きく打ちあげられる場合、記号的世界におけるその想像力そのものが超越的であることによって、つまりすぐれた作品における想像力の世界はすでにフィクションとしてことばに抛りながらことばを超越したものであるから、日本語のワクの中の朝鮮人作家としての自由の条件がそこで充たされ、したがってその作品の独自性の条件そのものが獲得されることになる。というのは、その独自性の保証を妨げるには日本語は決定的な支配力を失うということなのだ。

（『在日朝鮮人文学』の確立は可能か）

『週刊読書人』七二年二月一四日）
このような、日本語の呪縛を超えて「普遍的なもの」に到ろうとする金石範の思想は、磯貝治良の指摘する如く、「母国語を奪われ、日本語の呪縛という十字架を背負いながら、まさに背負わされた十字架をもって起死回生の蘇生をはたさんとする、『境界線に生きる者』の強



靱な思想の萌芽」そのものである。

日本語のワクの中で朝鮮人作家としての自由が存在し得るか、というのが金石範が自らに課したテーマであるが、その要点を整理すれば以下のようになる。①日本語の持つ民族的形式（音、形などの物質的、個別的側面、いわゆる能記——意味するもの——に該当する）の機能が、朝鮮人である自分を束縛するということであるが、その束縛は、民族語である日本語そのものの機能（論理的側面）と、日本語が過去の支配者、言語を含めた朝鮮の民族的なもの収奪者のことばであったという倫理的側面が一体になったものである。②そこから当然、実作者としての自分を束縛しようとするもの（金石範はそれを「ことばの呪縛」と呼ぶ）から自分を解放する作業が同時に起こらねばならない。しかし皮肉なのは、自分を束縛してかかることば（つまり日本語）で自らを解放するという矛盾の中でこの作業が持続されねばならないということである。それは同時に、日本語自体が解放されたものにならねばならぬことを意味する。つまり、日本語の民族的形式が持つ機能を超える普遍的側面を見出すということであり、自分にとって、日本語で書くこと自体が、同時に文学的（言語的）普遍を志向する作業に他ならないことを意味する。

以上のような思考の論理的展開の上に立って、金石範は自己検証を厳しく繰り返しながら、更に次のように書く。

日本語で「朝鮮」が書けるかどうかということは、在日朝鮮人作家、少なくとも私にとっては「書く」ことの根拠を問われる問題である。つまり、朝鮮人の私が日本語を使っているために、そのことばのメカニズムに妨げられて、朝鮮を舞台にするとしないとかかわらず「朝鮮」を書くことができないとなれば、私は在日朝鮮人作家として「書く」という行為の根拠を失うしかない。早い話が、小説を書くことをやめねばならないのだ。逆にいえば、日本語でも「朝鮮」を書けるというのは、私が作家的な自由の一端を自分のものにするのが可能だということの具体的な表現に他ならない。（「日本語で『朝鮮』が書けるか」 『言語』七六年一〇月）

表現主体の作家が、自らを抑圧してきた（現在も）言語との間に緊張関係を有し、その緊張関係をバネとして、その言語を手段（武器）として表現することによって解放をかちとるということである。

〈朝鮮〉を〈日本語〉で表現するというのは、非常に困難な作業であるに相違ない。在日朝鮮人文学は、現在

も続く歴史の苛酷な現実の前で、否応なく思想的存在にならざるを得なかつたのである。

付記

近く刊行予定の『日本の中の朝鮮文化をめぐって（仮題）』（東方出版）に私は「在日朝鮮人文学」なる一文を書いている。なるべくそれと重複しないように書いたつもりなので、本稿とそれとを併せお読み頂けると幸いである。

（よしだ ながひろ・文学部教員）

おいてけぼり

— 宮本輝試論 VI —

芝田啓治

八、〃おいてけぼり” 生と死の行方（その一）

我国は、統計資料でみると男女共に最長寿命である。男性の平均寿命は七五歳を越え、女性のそれは八〇を優に越すといったもので、世界に誇っている。一九九〇年の資料によれば、高齢者即ち六十五歳以上の人口が一二パーセントを占め、又、百歳を越す人が三二九八人と驚くべき数字を示し、二一世紀初頭には間違いなく世界一位の高齢者国になるだろうと予測されている。人口の年齢による分布が、戦後直後のピラミッド型から今や典型的な釣鐘型となり、遂には人類がかつて経験した事のな

い逆三角形になるかも知れません。「人生五〇年」と言った時代と比べれば、隔絶感を抱かずにはおれませんが、今尚「人生五〇年」いや、エチオピアやブータンなどのように「人生四〇年」といった国がある事を忘れてはならないでしょう。

北の国々は今飽食の時代の中にあり、医学の高水準、福祉の増進、労働時間の短縮、余暇の充実と力を注ぎ、延命をはかり高齢化社会を迎えているのである。南の諸国を足場にして。

しかし、ただ齢を無駄に重ねるのが人生でない事は理の当然であり、如何なる人生を歩むか、歩み得るのか



より一層高齢化社会では問われているのである。

「死顔こそが、その人間の、隠しても隠しきれない究窮の本性なのではあるまいか。」（宮本輝「春の夢」）

五年前、職場の方に進行性筋萎縮症という現代の医学では手の施しようのない難病と闘っておられた難波絃一氏を迎える事が出来た。その講演の中で、彼の確実に近い死を前にした生き方が展開され、イキイキとした生を

私たちに示された。生とは何か。死とは何かということ

を。
「みなさんは自分の未来は、まだまだ先があると思われているでしょうが、もし、死というものをつきつめられた時に、自分が想像していたのとは違う世界があるということを知ってほしいと思います。その時人間は、どんなことをやっても、一日でも長く生きていこうという生命の飢餓状態に陥っていくわけです。」（難波絃一）「この生命燃えつきるまで」

「自分がこういひどい病気にかかっているということを知りましたのは、発病してから一年半目でした。そのころはまだ三六歳でしたから、人生これからという時でした。幼い四人の子どもを残してこの世を余りにも早く去っていかなければならぬという現実には、ほんとうに何とも言えない気持になりました。」（同）

しかし、この難病は容赦なく、刻一刻と進行して行くのであった。一般的には、三年後には物を飲み込めなくなり、四年後には呼吸すら難しくなるというものであり、生命体を除々にかつ確実に蝕んでいくのがこの病気の特徴であるらしい。人は、死と直面すると自暴自棄に陥るのが極普通であろう。

彼も又、講演の中で次のように語っていた。

「こんなつらい目に合うのだったら、今死ねるうちに死んだ方がいいのじゃないだろうか。」と。しかし、彼の職場である岡山県立東岡山工業高校の同僚や生徒たちの献身的な支えや、又彼の信仰によって、家族と共に立ち上り、病いと闘い死と闘うのであった。そして、彼は遂に一つの結論に辿り着くのである。

「この生命というものを他の人に献げるときに、他の人のために生きようとする時に、私たちは思いもかけぬ豊かな人生が開けてくるわけです。」と語りかける彼の顔は、死を乗り越え、充実した生を生き抜いている人の明るい笑顔であった。これ程のハンディを背負いつつも、自分の生すら思うに任せられない位置に立ったとしても、他の人のために自分の生を献げようとするのである。

「今、この時間にこうやって両手を動かしながらしゃべっているこの状態が私にとってはベストの状態なんです。これ以上のことは望めないと思って、私はこの一瞬一瞬を力の限り、生命の限り生きていく以外に、私の生き方はないわけです。」(同)

このように身をかわず事なく死と対峙しながら、生を生き抜く視点は彼のそして家族の死闘の中から産み出されていったのである。残念ながら、一昨年三月に逝去されたそうだが、彼の生き方が多くの人々の心の中に、そ

れも絶望という人生の崖淵に立つ人々の心に勇気と指針を与えたであろう事を確信し、感謝しつつ、その御冥福を祈りたい。

「文学の最後のテーマは、やっぱり生と死だと思っんです。これ以上重要な問題はない。それはセックスだって、恋愛だって文学のひとつの領域でしょうが、人生最後になると、結局生と死じゃないか。」(宮本輝「川、わ



たしのふるさと」

宮本にとつても、このテーマは極めて重要な問題として、多くの作品の中で扱っている。今、その周辺を辿ってみたいと思う。

彼にとつて生と死という人生の原点が何処にあるか、又それを何処に置いているか、先ず考えてみたい。

宮本の場合、それを絵で表わすと、冬の荒れた日本海の前で佇む初老の後ろ姿であったり、又ある殺風景な病院の一室で、家族に看取られる事なく深い眠りに陥った孤独な老人の姿かも知れない。

「ぼくは精神病院のあの病室のドアを開けてもらって親父の姿を見た瞬間に非常に多くのものを感じましたね。何かもの考えるとき、必ずその風景が浮かびますね。」

(宮本輝「川、わたしのふるさと」)

宮本にとつて、父の生と死が心の奥でどつかと座り込んで、時には彼を励ましたり、支えたり、又その逆で彼にまわりついたりするのである。精神病院の戸扉が開いて、父が横たわっているベッドに近付くまで、数名の患者の姿を見てはその人達の様々な人生を思い、何が彼らをこのようにしたのかを考えざるを得ないのであった。もちろん、人の人生についても。

「ぼくは、どんな人間も何らかの使命を持って、やつ

ぱり生まれ生きてると考えてるんです。」(同)

無意味な生など決してなく、その生の向うにある死も又、必ずや大きな意味を持っているものなのである。

この宮本の視点が、彼の文学上極めて重要な要因ではないかと思われる。

彼の作品を、このテーマに沿って三つに分類する事が出来る。

(1) 生と死のバランス

「生きていることと、死んでいることは、もしかしたら同じことかも知れない。」(宮本輝「錦繡」)

宮本は、本来相反する生と死をどのように把えているのかを示す一つの興味深い言葉ではないかと思われる。

死に直面し、深くつきつめていけばそこに生が存在し、様々な人生の中で戦いを通り抜け生を生き抜けば、静かな死が待っているといったように、同じ重さで生と死を考えた時、又苦しい人生の局面で、生きていようが、死んでいようが、どちらでも大差ないという極限状態すら起り得ると考えているのである。

作品の中で、この問題を追ってみたい。

(1) 「泥の河」

主人公信雄の両親が営む食堂に、いつも顔を出し、そ

ここで一休みし、終えると馬車を引いて行く男がいる。その男と馬とは共に働きもので、やっと中古ではあってもトラックを買えるまでになった。

「馬の蹄がどろどろ溶けているアスファルトで滑った。信雄の頭上で貞子が叫び声をあげた。突然あともどりしてきた馬と荷車に押し倒された男は、鉄屑を満載した荷車の下敷になった。後輪が腹を前輪がくねりながら胸と首を轢いた。さらに、もがきながらあとずさりしていく馬の足が、男の全身を踏み砕いていく。」(宮本輝「泥の河」)

少年信夫にとって、この男の死の意味を深くは理解出来ないまでも、一生懸命働き幸福に手が届きそうになって、それを把み損ねた男のくやしさが伝わって来るのである。何日も置き去りにされた事故現場やその現場を言葉なく見つめている母子の姿を目の当りにして、生の直ぐ隣りに死が潜んでいるという事を知るのであった。

又、家の裏側を流れている泥の河に浮ぶ嬰兒の死体や沙蚕採りの老爺の転落死なども同様、その象徴であろう。

「人間の骸骨が転がって、すぐ横に死のあるような世界で庶民がどうやって生きていったんだろうという、ぼくにはたいへん魅力的な時代なんですわ。」(宮本輝「小説のおもしろさ」)

この「泥の河」という作品では、廓舟の一家が逆にその生の役割を演じている。喜一少年のしたたかさや時に見せる残忍さ、喜一少年の姉銀子の純真な献身やためらい、その姉弟の母親が持つ不思議な魅力や色香など、すべて生々しい生につながるのである。

このように生と死のバランスの上で、この作品は展開されていくのであり、暗いイメージがあるかと思うと爽やかな雰囲気漂っているのはそのためである。

(ロ) 「螢川」

主人公の中学生である童夫の周辺に繰り広げられる生と死が、この作品の主要なテーマと言える。

「友情のしるしやが……」

これからずっと俺と友だちでおるっちゃ。ずっと、おとなになっても、ほんとうの友だちでおるっちゃ。ええか?」(宮本輝「螢川」)

このように言っていた関根圭太が神通川で溺れ死んだという報せを、童夫はその翌日聞かされるのであった。

「嘘や。なァん、嘘やっちゃ」

童夫は家に帰ると井戸水を腹一杯飲んだ。そして押し入れの中に潜り込んだ。何故そうしているのか、自分でも判らなかつた。」(同)。

二人の中学生が、共に憧れをクラスメイトの英子に抱

いているという事を明かし合い、そして友情を結んだ矢先の溺死は竜夫にとって大きな衝撃であった。父の病気で少し死の臭いを嗅いでいたが、死がそれ程までに突然やって来ようとは思っても寄らなかつたのである。友人の死というそのような経験の中で、その後の父の死をも不思議と冷静に受け止める事が出来たのであった。二つの死、突然何処からともなく忍びよる死と、一年は持たないだろうと言われて、覚悟した上で待たなければならぬ死とが交錯しつつ描き出されているのである。

「重竜は顔を歪めて泣いた。声もたてず涙も流さず、それでも精一杯顔筋をひきしぼって泣いたのである。」

千代は重竜の手を握りしめ、口元に耳を寄せた。泣きながら夫が何か呟いたような気がしたのであった。(同) 社会の流れから「おいてけぼり」を喰い、落ちぶれていく男の死、それをどうする事も出来ず、ただ黙して受け止めざるを得ない妻の哀しみ。

しかし、そのような竜夫や千代が、父や夫の死を経て、生に向って歩み始めるのである。

英子と銀蔵という老爺との四人で、いたち川の上流を目指し、螢の大群に夢をかけ、期待に胸弾ませ歩き続けるのであった。

「千代とて、絢爛たる螢の乱舞を一度は見えてみたかった。」



出逢うかどうか判らぬ一生に一遍の光景に、千代はこれからの行末を賭けてみたかったのであった。(同)

「四人は声もたてずその場に金縛りになった。まだ五百歩も歩いていなかった。何万何十万もの螢火が、川のみちで静かにうねっていた。」(同)

螢の交尾、それも無数の交尾を目にし、この光景が一つの生を象徴しているのである。父の死・友人の死を越える菟夫、そして夫の死を越えようとする千代。ともかくも、どのような生が二人を待ち構えているか判らないが、一步踏み出そうとするのであった。

（イ）「幻の光」

突然の死と覚悟の死という二つの死について触れたが、前者の不可解な死をベースにおいているのがこの作品である。

「初めての子供が生まれて三カ月で、男としては張り切ってる時期やった。警察の人も首をかしげるほど、死ぬ理由は何ひとつ見つかれへんかったんです。」（宮本輝「幻の光」）

「それもこれも、みんなわたしには判らへんことばっかりや。あんたは、なんであの晩、轢かれることを承知のうえで、阪神電車の線路上をとぼとぼ歩いてたんやろか……。」（同）

動機の見当らない自殺、何故夫は若き妻と三カ月の愛児を残して死なねばならないのであろうか。ふっと死にたくなつたとか考えられない死など存在するのか。それとも、夫には、妻に隠した世界があつて、その世界で生きられなくなつてしまつたので死を選んだのか。今

となつては知る術もない。

妻はもどかしさと腹立たしさを感じながら「おいてけぼり」を喰つた恨みを抱きつつも、やつと後追い自殺の誘惑を断ち切り、愛児のために生きようとするのであつた。しかし、再婚して新しい生活をおくり、幸福になつたとしても、やはり夫の死に拘り続けるのである。

「人間は、精が抜けると、死にとうなるんじゃけ。」（同）



不可解な夫の死によって、それも自殺によって、幸福な生が一瞬のうちに崩れ去り、死を恨み、夫をも恨む若き妻の「おいてけぼり」感を描いた同じような作品に「錦繡」がある。

「幻の光」と違う点は、心中事件で夫が生き残るといふ点であるが、しかし考えてみれば、死のうが、生命を繋ぎ止めようが、結果は変わらないと思われる。妻の身を切られるような哀しみや痛みは、どちらにせよ癒される事はないのであって、この意味で言えば生も死も同じ事である。相反するは生と死が、表裏という意味ではなく、全く同価値であるという局面も人生にはあるのだといった恐い事実を提起している。

又、「星々の悲しみ」という作品では、同様、友人の突然の死を扱っている。

一八歳の主人公志水靖高は受験勉強などそっちのけで、一年間に一六二篇もの小説を読み漁っている。何処かで焦りを感じながらも、又それを紛らわすかのように毎日毎日予備校へではなく、図書館へ通うのであった。同じような二人の浪人生と知り合い、その後も三人で悶々とした日々を送るのだが、そのうちの一人が医学部受験のため重い腰を上げた矢先、腸癌で死んでいくのである。

「自分が、いままさに死にゆかんとしていることを知

らないままに死んでいく人間などいないと、ぼくは思う。そうでなければ、人間が死ぬ必要などどこにもないではないか。人間は、そのことを知るために、死んでいくのだ……。だが何のために、そんなことを思い知らなくてはならないのか、ぼくには判らなかつた。それを考えると、なぜかぼくは何かに祈りたくなるのだった。」(宮本輝「星々の悲しみ」)

死に直面して、自らの生を、そしてその生の終焉である死を見つめ直すのである。

(二) 「青が散る」

私立大学の一期生として入学した椎名療平が、誘われるがままに硬式庭球部に入部し、様々な友人との出会い、そして別れが描かれた作品である。

「幻の光」「錦繡」「星々の悲しみ」が不可解な突然の死を扱っていたのに対して、この「青が散る」という作品では、友人の覚悟の死というより、因縁のある死、忌まわしい死を置いている。

「祖父が狂死し、二人の兄もまた同じ道を辿つたという安斎の家系を思い、自分もまたいつかその末路を行くのではないかと、血も凍らんばかりに悩んでいる安斎克己の心を、療平は泣きだしたくなる気持で見つめているしかないのだった。」(宮本輝「青が散る」)

「安齋克己」の一族の忌まわしい歴史は、そのとき燎平にはもはや偶然などではない、この世にひそんでいる空恐しい、避けることの出来ない必然による道筋であるように思えた。」(同)

駆け足で通り過ぎていった安齋の死は、運命という言葉でしか片付ける事が出来ないものだし、論理の世界を越えたものといえよう。そんな死に対して、宮本は不動産業を営む青年実業家氏家の生を置いている。

この青年実業家は、放漫経営の末に数十億の負債をかかえ、倒産に追込まれたのであるが、安齋の死に対して「そいつ、ほんまに恐かったんやろな」「俺も恐い。これからのことを考えると、恐いなア。そやけど俺は死なん。必ず生き返ったる。」「この世は恐い。人生は大きい。この三日間でつくづく俺はそう思った。人間は死ぬよ、哀しむべきことやない。ただ、人が死ぬということは寂しい。そやから人生は、やっぱり寂しいもんなや。しかし、俺は生きて生き抜くぞ。乞食になり果てても、気が狂うても、俺は生き抜くぞ。そうやって必ず自分の山に登ってみせる。」(同)

生の中に死ぬ程の苦しみや悲しみ、自分の手ではどうしようもない運命的なものが潜んでいるのである。しかし、その苦しみ、悲しみの中から再び生への胎動を始め

るのが、生き残った人間の成すべき唯一の方法なのである。

「哲之は夢を見た。自分が蜥蜴になって、草むらや石垣を這いずりまわっている夢であった。死んでは生まれ。何度も何度も蜥蜴となつて生死を繰り返した。」(宮本輝「春の夢」)

生と死という相反するこの二つの要素を、時にはぶつけてみて直ぐ隣りにある事を知らしめたり、死の向う側に生があり生の向う側に死があるという事、又生きているのも死んでいるのも同じであるという極限状況ですら、我々の生活の中のちよつとした髪の中に隠れ住んでいるという事を、読者に語りかけると共に深く感じさせるのである。

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

投

稿

現代思想の快楽

そのⅡ

それゆけバタイユ——ロード・オーシュ眼球譚は痙攣するか

松原 恵 二

今回は栗本慎一郎かロラン・バルトについて云々しよう、などと公に宣言しておきながら誠に申し訳ない。なんとなく気が変わってしまったのだ。だから読まれる方も軽い気持ちで読んで下さいませ。まさかジョルジュ・バタイユの新しい理論や学説を構築しよう、などは考えてはおりませんのであしからず。

* * *

ジョルジュ・バタイユは今世紀で最も重要で偉大な小説家、思想家の一人であり、その著書は小説や芸術論、文芸評論は勿論のこと、社会科学までも多岐に渡り展開されている。特に彼の代表作の一つである『呪われた

部分』などは副題に「普遍経済学の試み」と記述されているように、そこには拡張での経済学の枠組みまでも抱括している秀作である。そのバタイユの作品の主題はいつも人間の身体について固持して出来あがったものである。『眼球譚』や『松毬の眼』、『マダム・エドワルダ』などの好色——ポルノグラフィック、スカトロジック——文学作品は言うまでもなく、『ドキュマン』誌に記載された一連の批判的散文や経済学の領域にある『呪われた部分』の主要なテーマさえもが人間の身体論から出発したものである。

例えば、『ドキュマン』誌の「足の指」と題する評論



では通常においては醜悪とされているもの、一般的に恥
ずべき対象とされているもの、つまり身体の一部分であ
る足の指が顕揚される。《足の親指は人間の他のどんな
部分も、類人猿の同じ部分とこれほどまでに差異を示し
ていないという意味で、人間で最も人間的な部分である》
と。《足の親指》が《人間的》であるというこの逆説め
いた寓意表現は何を示唆しているのであるうか。《足の
親指》という言葉と《人間的》という言葉にバタイユは
如何なる香りを漂せているのだろうか。取りあえず、こ
こから考えてみたいと思う。

具体的に考えてみると恐らく《足の親指》とは靴下や
靴で隠蔽すべきもの、象徴的次元で考えてみると不快な
汚穢ゆえの禁忌の領域、ということになるだろう。そし
て《人間的》とは『呪われた部分』や『エロティシズム』
から考えてみると、生を保存し死を回避するもの、即ち
生命活動の諸部面において持続であり衰退である部分Ⅱ
呪われるべき死との係わりを求めて腐敗、不純、不吉な
領域を恐怖しながらも自発的に求める生をまさに生きん
とする行為、つまり死に至る生の称揚Ⅱエロティシズム
であるということではないだろうか。ならば《足の親指》
が《人間的》であるという逆説は、歴史的に人間の身体
において《醜》と見なされている領域こそ実は《美》の

エロティシズム領域である、という意味になる。このバタイユの意図を物体振らずに私なりに解釈してみると、安直ではあるが古典的な身体の図像学に対する攻撃であると言えらるだろう。かつてザッヘル・マゾッホが『毛皮を着たヴィーナス』のなかで『醜の美学から生れた奇妙な理想、妖婦フリーネの肉体に宿ったネローの魂——中略——さあ毛皮を着け鞭で打つてくれ』と毛皮に対するフェティシズムを見事なまでに表現したように、バタイユもまた私達の視線を暗がりの部分に引き寄せて、不恰好でおぞましい身体のフェティシズムを表現したのである。そしてこのフェティシズムが私の言った古典的な身体像への攻撃につながるのだ。見えない部分への欲望、ロラン・バルトが『テクストの快樂』のなかで『二つの衣服（パンタロンとセーター）二つの縁（半ば開いた肌着、手袋と袖）の間にちらちらと見える肌の間歇。誘発的なのはこのちらちらと見えることそれ自体である』と言つてのけた警句とバタイユのこの暗黒への嗜好がこの点において非常に似かよつてるので興味をそそる。しかし今回はこれだけにしておきたい。

* * *

ごく当たり前のことだが厳密にはバタイユの身体論は決して彼独自のものではない。根幹に心身二元論があり、

それに対して勃興したフランスの文芸家ダダイストやシュールレアリスト達の思想であつた（例えばデュルーズ、ガタリの『アンテ・エディプス』によると、アルフレッド・ジャリの『超男性』やマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』、そしてヴェリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』までもがそれに該当するということらしい）。トリスタン・ツアラを中心として起こつたダダイスト達やアンドレ・ブルトンを中心として起こつたシュールレアリスト達は皆こぞつて身体の古典的美学、そしてこの古典的美学によつて毒性を抜き取られ、愚かにも端正で衛生的な代物と見なされた観賞用的身体を愚弄し、その背景にある理性中心主義を攻撃した訳だ。日本では余り知られていないが、ダダイストの一人であつたドイツのゲオルグ・グロツスは金と欲とで肥満化した当時のブルジョワジーの身体を醜態に戯曲化したり、シュールレアリストの一人であつたスペインのサルヴァドル・ダリは代表作『記憶の固執』や『ナルシスの変貌』などに見られる特有の色彩で身体の不透明な厚みを如実に浮かび上げさせようと試み、身体の変革を企てた。イタリヤのシュールレアリストであるジョルジュ・ド・キリコは極めて幾何学的な身体像を抜き、フランスのマルセル・デュシャンは『モナリザの微笑み』に口髭を書き加えて嘲笑の基



準とした（何故ならこのモナリザこそが美の理想と考えられているからだ）。そして最も有名と思われるのは、キュピズムの指導者であるパブロ・ピカソの『アヴィニヨンの娘たち』や『ゲルニカ』などの作品であろう。セザンヌや後期印象派——日本人がやたらと好む——における美しく輝いた女人像から写真的な遠近法を捨て去り、歪曲された醜い女性を描いた。以上これらのすべて作品はバタイユにも見られるような過去の機械的因

果律や無機質的方法論に対しての反抗であり、攻撃であり、扇動であった。対立図式としてあった（優—劣）の関係辱しめ、悪と醜の極である（劣）の極を上昇させることで新たな意味への方法を探究したのである。そしてまさにこの思考がバタイユに受け継がれ、バタイユ文学を構築するに至ったのである。

* * *

身体の模索は文学（『言語』）の懐疑と共に起こった。

ロラン・バルトが『零度のエクリチュール』で言うように《おしまいにはマラルメが登場し、あらゆるオブジェ化の最終行為である殺戮によってオブジェ文学の構築の仕上げをした。周知のようにマラルメの努力はすべて言語の破壊に向けられた》のである。つまり文学なる代物は言語の屍体と化してしまった訳だろう。今やかつてヘーゲルが『美学』で講じた精神的内包を感覚的形態へ外化し客観化させる造型的芸術と純粹に主観的内面性に適應するように表出する音楽を止揚させて総合的にもたらしめた文芸、それも理念と形態において最も理想的な浪漫的芸術詩はすでに古典の産物となり下がり、現代芸術には浪漫的色彩など無い。我々は自己なるものを喪失したため浪漫主義が謳った自己の解放など言葉遊びにすぎなくなつた。そして言語は文学を犯し、人間の身体を犯し、体臭を放つまでになつた。——事実か！

バタイユの僚友である暗黒派ピエール・クロソウスキーもこの身体論と文芸を余すことなく見事に表現する。身体と言語の補充関係を、あるいはむしろ両者の反射関係を的確に捉え、その土台の上に作品を位置づける。

『かくも不吉な欲望』のなかでクロソウススキーはこう言っている。《ボルノグラフィは肉に対する精神の一つの形式、つまりその意味で無神論によって限定された形

式であるから、もし肉を創造した神が存在しなければ、肉の放蕩を沈黙に帰すためには、精神にとつてもはや言語の放蕩しか残っていない。そうなれば肉の放蕩ほど言語的なものはない》。クロソウススキーにとつてみれば肉体は過剰なほど言語的であり、その言語は身体を反映しながら自らを乗り越える行為を實踐しているのだろう。言語が欲望する、欲望する言語、かくして『欲待の掟』は執筆されたのか！

そしてもうひとつ、文学の舞台で大きな転換劇が演じ



られた。音声言語（パロール）と文字言語（エクリチュール）の再認識、つまり構造主義——ポスト構造主義である。

ジャック・デリダによれば、ソクラテス、プラトン、アリストテレスからデカルト、ヘーゲルを経てフッサール現象学に至るまでの従来の西欧の全哲学、全思想的営為を「ロゴス中心主義」の形而上学と規定する。ロゴスとは話し言葉（パロール）、神の悟性、人間の理性、論理性、合理性などの多義性において理解され、つねに真理の最後の根拠としてもち出される西欧のエピステーメである。このロゴス中心主義の基本的所作は現前や（自己の現前）が真理の形式であり真理の価値である。そうなる（自己への非現前）あるいは不在そのものである文字言語（エクリチュール）は書く主体と読む主体の不在は徹底的に貶められ、排除される。これが、ロゴス中心主義の文字言語に対する基本的な態度である。

このロゴス中心主義の解体の試みは、テキストの読解作業を通して遂行される。あらゆる思想的営為はエクリチュールの織り物として、すなわち「テキスト」として、構造として与えられる。ここで著者の主観性が抹殺されて、主観の手の中にあると考えられていたテキストの意味体系も解体される。書物は主観に従属することを止め、

それ自身が独立したシニフィアンの体系へ変貌する。ここで作品は「戯れ」の実践となり、「戯れ」の意味作用を招き入れる。このことが音声言語と文字言語との転換劇、構造主義——ポスト構造主義と呼ばれる西欧現代思想の営為である（詳細はデリダの『根源の彼方に』でどうぞ）。

確かにバタイユに関して化石学者デリダの名前を出す、生田耕作氏言わく「バタイユ悪用の顕著な一例」と叱責されるかも知れないが、ひとつの思想的視座を提出するという意味で御理解御免願いたい。

——ロード・オーシュ眼球譚は痙攣するか

聖なる神を俗世界へ引き摺りおろすことや、対立概念を逆転させることは、それはそれで凄いことであるが、その程度の図式的展開劇だけでは何も最重要作家の一人だと言う訳にはゆかない。それは単なる理想主義者の無為なながきに過ぎない、と喝破されればそれでおしまいだ。バタイユがミッシェル・フーコとならんで（フーコとならべると生田耕作氏にまた叱責されそうだが）世に冠たる思想家たらん所以はどこにあるのだろうか。今回はフーコについては触れる心積りは無いので、バタイユの最も身体的な作品『眼球譚』について最後の拡散する

思考をしてみたいと思う。

——ロード・オーシュ眼球譚は痙攣するか

《実際、眼に関しては、魅惑という語のほかに浮かべることがは無理のように思われる。動物や人間の身体でこ



れ以上に魅力的なものはないのだから。しかし極端な魅惑とはおそらく恐怖の極致にあるのだ》誰しも人間の眼球に思い知れぬほどの阿片な戦慄と、深層ドロ沼の恍惚を覚えたことがあるはずだ。(ああ、私は愛するあなたに見られている)この言葉に距離は必要でなく(愛するあなたは隣りにはいない——不在なのだ)、眼球が私の身体を捕えたその瞬間、私の衣服は引き裂かれる。眼球は身体に働きかける能動的な言葉の効果のみならず、働きを受ける限りでの身体の反応をも把握する。そして私達には恐怖の極致がニッコリと眼球を輝かしてお待ちかねしている——苦惱であり歓喜である。

例えばルイス・ブニュエル監督の『アンダルシアの犬』の冒頭部のシーンに、若い婦人がカミソリの刃で眼球を切り取る行為がある。これはまさしく滑稽でありながら不気味な出来事である。そしてこの眼球の裂け口から何物か——そう、何物かが生じてくる。

——モードと衣裳との関係において眼球譚は

私達は不安のためにか、焦燥のためにか、意味という名の衣服を身体に纏まとい町に出る。その衣服はシャネルやディオールであればなお更のこと良い。私達の代役は彼らがいづつも果たしてくれる。そして私達は彼らが際限な

く喋りたけること、饒舌になることの意義など決して求めたりはしない。その様な探究心はブライドがゆるさな
い、プレタポルテから出たブライドだ。

——最後に、ロード・オーシユ眼球譚は痙攣し
たのか、つまり

（きわめて猥褻で、残酷な、そして瀆神的な内容を凝縮したこの小説は、一種の固定観念をめぐる精神分析風物語ともいえるだろう）。『眼球譚』の訳者生田耕作氏は
そう記している。

（一部分空想的なこの物語が、いかなる思弁乃至教訓的な目的とも無関係に、作者が自己の精神の活動するがままに書く小説の流儀で製作されたのだということを理解させる）。昨年他界したミッシェル・レリスはそう記している。

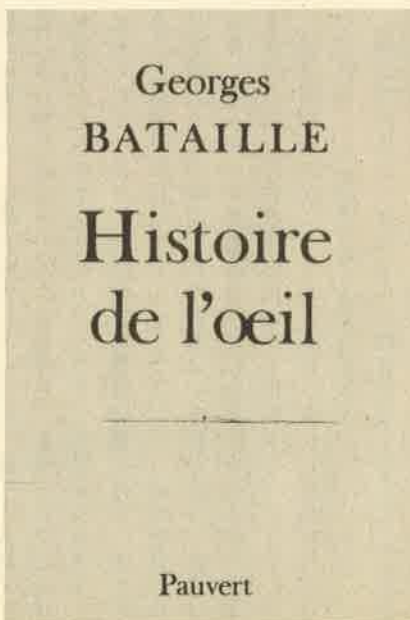
* * *

『眼球譚』が私の興味を刺激するのは、私の衣服を快く引き裂くからである。それに第一、この様な作品に思弁性や教訓など求める意志など私は持っていない（その意味で私はレイスを支持する）。そして私は、純粹に快楽の文芸として『眼球譚』を高く位置づける。——その文芸とは——つまるところ、素敵なお喋りと洒落た

悪戯が麗やかに織りなす痙攣である。

このうえなく常軌を逸した痙攣するテキストが結局のところ、このうえなく光り輝き、このうえなく甘美な死の兆しを与えるものであるとするなら、このことは全くスキヤンダラスな事実である。そして、このうえなくスキヤンダラスなテキストと見事なまでに戯れることが出来るのであれば、あなたは愉快な人間である。

最後に、私はこのテキストを可能な限り自由に、つま





りいかなる主体（主題）からも、対象からも、象徴や想像からも自由に述べてきた。しかしそれは同時に断片を述べたにすぎない。すべては語りつくせぬものである。そしてバルトの言葉を引用したいと思う。

バタイユのテキストには、たくさんの《詩的》コードがあります。主題論的なコード（高い／低い、高貴な／低劣な、軽い／泥に汚れた）、多義的なコード（たとえば《立ち方（起立、勃起）という語》、隠喩的なコード（人間は木である））。知のコードもあります。解剖学的、動

物学的、民族学的、歴史学者的コード。もちろん、テキストは知をはみ出します——価値によって

『テキストの出口』より

附記

眼を題材にした小説や詩は今までに幾度か読んできたが、最近おもしろい小説を発見した。ジャン・アントワヌ・ノーというデカダン派の作家の『エメラルドの目』という短編である。国書刊行会から『フランス世紀末文学叢書』として翻訳されているので、よければ一読して下さい。ペラダンの小説も翻訳されて載っています。

（まつばら けいじ・社会学部四回生）

連
載

学校閉鎖に抗して

——在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート

XI

梁 永厚

日本国憲法の前文に「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。」と述べられている。然らば一九四九年一〇月の朝鮮人学校閉鎖措置という暴圧は、国民に由来した権威ある国政であり、権力行使であつたのだからか！

新憲法下の私立学校法には、所轄庁が私立学校にたいし行政監督の権限を行使する際、事前に私立学校審議会または私立大学審議会の意見を聞かなければならないと

定められている（第八条）。そうした手続を経ることもせずに私立学校として認可した二〇〇校余りの朝鮮人学校にたいし、学校閉鎖という権力行使がなされたのである。この権力行使は、当時被占領下にあつたので日本当局の意ではなかつたという逃口上が可能である。だが国立教育研究所蔵の『戦後教育資料』を繙くと、逃口上は到底無理である。それは同資料の中にある当時の伊藤文部次官とGHQ民政局のネービヤ少佐との会談記録、さらに次官と民間情報教育局のルーミスとの対談記録からいえる。

(1) 一九四九年九月一九日、伊藤文部次官とネービヤ



少佐の会談記録。

首題 朝鮮人学校処置方案

ネービヤ少佐談

遺憾ながらこれは余りよい案とは云い難い。その理由は、暴力団体の処分に関連させてこの際学校をも一緒に片附けようとしているからである。

暴力団体は指令違反として処分せられたが、学校の場合にはそれは当てはまらない。朝鮮人学校の問題は日本政府が処理すべきである。それに関連して一言忠告したい。但しこの私の忠告は公表しないで貰いたい。

私は、朝鮮人学校が日本の法律に従わないという事例があることを知っている。併し在日朝鮮人が日本人同様日本の法律に従わなければならない。それと同じ意味において朝鮮人学校も日本の学校同様日本の教育に関する諸法令に従わなければならない。そこで若し朝鮮人学校が日本の教育法令に従わない場合は、日本の学校に關すると同様な厳格さ或は寛大さをもって処置されねばならない。朝鮮人学校が当然閉鎖されるべきだという点で私は貴方がたと同意見である。理由は朝鮮人学校は日本の法律に違反しているからである。文部省は日本政府の威信にかけて、それらの法律違反を取り締るべきだと私は考へる。私は学校の問題に就ては専門家ではないから、只實際問題に就て忠告申し上げたのであるが、専門家であるC I E (民間情報教育局) のニューゼント中佐は暫く帰つてはこれならないから、その代理のダールクウイスト

中佐のところへ、本日これから行かれて相談されてはどうか、これこれの学校は日本の法律に従わないから閉鎖したいと仰言れば、ダールクウイスト中佐は早速同意されることと思う。文部省として、この際より適切な処置をとられるよう希望する。そうすれば文部省の威信が高められることになるだろう。文部省としてはよく熟慮して善処されたい。何者も法律を守ることから除外されるべきでない。若し事が起らなければこれに越したことはないし、また若し朝鮮人が不法行為に出るとしたらそれこそ取り締るに絶好の機会ではないか。最高指令官閣五四八号の中ではこれらの朝鮮人学校は暴力団体と見なされていない、という事実にご注意されたい。兎も角ダールクウイスト中佐とよく相談されて善処されたい。

このネービヤ少佐の意見は、日本政府が団体等規正令違反として朝連・民青を解散させた延長線上で学校問題を処置しようとしているのにたいし、学校閉鎖には同意見だとしながらも「暴力団体は指令違反として処分されたが学校の場合はそれに当てはまらない」「最高指令官閣の中では朝鮮人学校は暴力団体と見なされていない」と、日本政府の態度をたしなめ、純法律論として措置す

るよう押えている。

(2) 同年九月二十七日、伊藤文部次官と民間情報教育局

のルーマイスとの会談記録。

朝鮮人学校問題について（久保田文部省管理局長
同席）。

次 官・先日CIEに提出した文部省の案（学校閉

鎖措置）についてCIE側の御意見を伺いたい。

ルーマイス・CIEのダールクウイスト中佐によく話して置くから文部省とCIEとで協議すべき旨ネービヤ少佐は述べていた。同少佐は共產主義を教え、法律に違反している朝鮮人学校は閉鎖せしむべき旨強調したが、とくにその目的のために朝鮮人連盟の解散命令を利用すべきではない旨をのべた。

ルーマイス・文部省案第一の六項は、朝鮮人連盟により設立された学校は廃校となるとあるが、この点はどうか、之は解散命令を利用しているのではないか。

次 官・そのように見えるかもしれないが、日本では学校の設立者がいなくなれば当然に廃校になるのが法的な通念である。若し他の

設立者がその学校を引きつげばそれは別の新しい学校である。

ルーミス・その主旨は分るが学校を再建できる旨を書けないであろうか。

次 官・GS（民政局）は再建を考えていないよう

である。文部省としても日本の法律を守らないような学校は許可しない方針である。この案によって学校が守るべき条項を細かく規定したのである。この案には朝鮮人学校に対する文部省の根本的態度が表現されているのであるが、これにたいしCIEは如何に考えられるか。

ルーミス・先程お話しした第六項目以外はCIEも同意見である。ただし「CIEよりアプルブ（承認）された教科書云云」の文句から「CIEにより」の句を削除して頂きたい。

この会談においてもCIEは日本当局が「解散命令を利用しているのではないか」と疑問を示し、さらに「学校を再建できる旨を書けないだろうか」と朝鮮人学校の再建を視野にいれ教育問題として対処しようとしていたふしが見える。ところが文部次官はさきのネーピア少佐との会談では話されていない「民政局は再建を考えて

いない」、と答えるなどの方便をろうしてまでも、朝鮮人学校を閉鎖しようとしていたと推測できる。

そして文部省は、一九四九年一月十九日、第一次閉鎖措置を九〇校にたいしてとつたのである（内訳、認可校五四校、無認可校三六校。以上のうち学校財産接收七四校）。この第一閉鎖措置から外された朝鮮人学校は、監督官庁の長である都道府県知事より、設立法人の改組、学校認可の再申請を二週間以内にするよう求められた。全国の朝鮮人学校の設立法人の改組書類、学校認可の再申請は一月二日に文部省に集約され、翌三日、大阪の建国小・中・高校だけを保留とし、他はみな不認可とされた。不認可決定に因んで一月四日付で第二次閉鎖措置がとられた（内訳は認可校一七八校、無認可校九四校。以上のうち学校財産接收六一校）。これら閉鎖執行の情況については、金達寿の作品「番地のない部落」の中に、次のように描かれている。

そこへけたたましいサイレンのひびきとともに、ぞくぞくとトラックがやってき、まっ黒い山のような、波のような武装警察隊がおしよせてきた。教室から外へ出かけた人々は、そのまま襟首をつかまえられて放りだされ、まだ教室の中にいた生徒たちは一斉に泣きだして、おかみさんたちと共に机にしがみついたが、その机ごと彼ら



は猫か犬のように外へ放り出された。それでまたさらに腕をくじき、膝頭をうちわって、いつそうました子供たちや、おかみさんたちの泣き声。暗闇におおわれた学校のうちとそとで激しく押ししたり、押されたりのもみあう

乱闘となった。が、それは一瞬のうちのようなできごとだった。しまいには無我夢中となった人々はそれぞれの抗議のことは憎悪のことは発しなから、頭を横つちよにしておどろかかかっていったが、まっ黒い大渦巻のよな警官隊の警棒でその頭をうち叩かれ、腹を突き上げられ、蹴飛ばされてしりぞかなければならなかった。そうしているうちにも、もう後方の警官隊により、教室の入口や窓口までが忽ち用意されていたぬき板を十文字にはられて、釘をうちつけられてしまった。その警官の背に向って生徒たちが、泣きわめきながら馬乗りにとびかかりむらがついては、仰向にはねられた。」

さて大阪の場合であるが、一月五日、赤間知事により次のような談話が発表された。

今回政府の方針に基づきまして、本月二日朝鮮人学校に於ては、学校教育法其の他の条件をみたす所要の手續きをするよう通知いたしましたところ、五校を除いては一応書類の提出をみたので、文部省当局において、慎重審議の結果、不幸にも財団法人朝鮮学園は設立許可の取り消しとなり、傘下の学校三十二校と新しく法人の設立申請をして不許可となつた三校及び手續未了の五校と合わせて四十校に対して、文部省の指示に基づき、学校閉鎖の止むなきに

至ったのでありまして、夫々の学校又は責任者へは本日直ちに通知して、学校を閉鎖し授業を廃止して十一月七日までに左の処置をとるとともに、児童生徒の公立学校への転入学につきまして出来る限り協力し、斡旋されるよう示達いたしましたのであります。即ち

- 1、学校長から児童・生徒・教職員及び保護者に対し、学校廃止の通告をすること
- 2、表門、裏門等の門標その他学校標識を除去すること

- 3、学校長又は、学校管理者は、学校掲示場又は見易い場所に学校閉鎖の旨の掲示をすること

- 4、学籍簿を整理の上、府庁教育課に提出すること

又、朝鮮人子弟の受入れについては、

- 1、現住所を校下に持つ学校に転校させる
- 2、年令相応の学年に編入する

- 3、朝鮮語、同文化、歴史などは、一週四時間を限度として課外授業が認められる

等の方針の下に万遺憾のないよう市町村教育委員においてそれぞれ準備を完了しております。

私は、この際特に転入学するものも、又、受け入れるものも、どうか日鮮融和の精神をもって積極的

に手を差しのべて、子供も親も仲良く手を握り合つて児童生徒が勉強されますよう、切に府民各位のご協力をお願い申しあげます次第であります。

この談話すなわち学校閉鎖に抗して、大阪の朝鮮人学校関係者は、五日の午前十一時より、鶴橋朝鮮小学校（現大阪市立鶴橋幼稚園）に集まり協議をした。協議では硬軟の議論がでたが、「犠牲者を出さない」「事態が急迫しているので執行停止の訴訟を提起する」「学校再開のため長期的な闘いにはいる」「各学校単位で教職員、父兄が協議して当局の出方に対応していく」などを確認し合つて散会をした。そして同日の夜には各学校単位で教職員と父兄たちによる対策会議が開かれた。ほとんどの学校は状況がはつきりするまで、児童生徒に「自宅学習」をさせる方策を決めた。

そして十一月六日に、各学校で「民族教育は正当であり必ず認められる。祖国でも注目をしている。朝鮮の子どもとしての誇りを大事にしよう。連絡のあるまで自宅学習をするよう。」などが児童生徒に伝えられ、七日以降は自宅学習にはいった。しかし八尾市にあった大阪朝鮮中・高等学校の生徒自治会の役員と多数の生徒は、自宅学習の指示に応じず「日本政府は民族教育を受けるの

を妨害するな！ われわれは自分たちの学校で勉強する自由がある！」と学校への登校を続けた。登校した生徒たちは学校周辺の田圃の中に集まり、「解放の歌」「朝の校歌」を歌いながら、警官隊と対峙し、ときどき学校へ入ろうとスクラムを組み校門突破をはかったが、六尺棒をもった警官隊に阻まれて校内に入ることができなかった。なお対峙は十日間ほど続けたといわれている。

自宅学習をしていた小学校の児童たちも事態が好転しないので、集団を組んで就学陳情デモを始めた。児童たちの要求は「日本の学校の中でも、われわれに朝鮮語、朝鮮の文化や歴史を教えるようにして欲しい！」というものであった。当時の『朝日新聞』『毎日新聞』の大阪版から陳情デモのあらましを拾い出すと次のようになる。十一月十四日と二十四日、旧鶴橋朝鮮小学校の児童たちが、隣接の鶴橋小学校と東桃谷小学校へ、朝鮮語と朝鮮文化、歴史の時間設置を求め陳情デモ。

十一月二十五日、旧田島朝鮮小学校の児童八〇名が四班に分かれて学校閉鎖反対デモ、大阪市公安条例違反により教員一名、児童三名検束される。旧東中川朝鮮小学校児童四〇名、中川小学校へ朝鮮語の時間設置を求め陳情デモ。

一二月初より、旧中西朝鮮小学校の児童、巽小学校へ

陳情デモ、次の要望事項をだす。①朝鮮語を教えること。②日本人児童と学力差のあるものには、年齢にかかわらず学力に応じた学年に編入すること。巽小学校は「教育基本法は一律に年齢に応じた学年編入を建前としている」と拒否。

二月四日、巽小学校にて朝鮮人児童授業を拒否して校庭、廊下に座りこみ。

二月五日、巽町の長井町長、北川町議会議長の二人、国家警察大阪府本部へ巽小学校問題を陳情。国警本部の警備課と捜査課の合同で対策を協議。

二月六日、朝鮮人児童転入学問題で巽小学校休校。

二月七日、朝鮮人児童二五〇名、巽小学校校庭、廊下に座りこみ。加美村の朝鮮人児童三〇〇名合流。警察により排除される。排除時児童の後見をしていた青年二名検束される。

旧城東朝鮮小学校児童六〇名、聖賢小学校に集団就学要求してデモ。二階の教室に座りこみ。警察の出勤により排除される。排除時児童を見守っていた青年二名検束される。

二月九日、巽小学校、入学資格のある朝鮮人児童一六名登校、四〇名は教室へ、七六名は要求を認めよと授業拒否し校庭に座りこむ。午前一時五〇分、文部省

通達「公立学校に收容した児童生徒が、学校の授業を妨げる場合には体罰にならない限度で懲戒を行うべきである。又、他の児童生徒の教育上悪影響を及ぼす場合は、出席停止を命じることができる。」に基づいて、村井校長は「あなたの子弟は、教育方針に反す要求をなして校長の指示に従わず、今日まで学校の秩序を乱す行為をくり返し、このままでは到底授業ができないから、学校教育法第二十六条により反省の実をみるまで出席停止を命ずる。」という父母宛の命令書に、児童の署名とつめ印を押させ、それを渡し学校から強制退去をさせた。

旧泉北朝鮮小学校の児童が、泉北郡八坂小学校に八十五名、信太小学校に八十五名と二手に分かれ巽町同様の要求をにかけて座りこみをした。八坂小学校の高橋校長は国警の府本部へ警察の処置を陳情。国警の片岡本部長は徹底検挙を約束。

十二月一日、巽小学校の校門にて警官が登校してくる児童を検問・首実験をし、出校停止命令書を発した七六名を校門より排除。心配をして駆けつけ警官と交渉にあたった父兄一名を不退去罪で検束。

あらまし以上のように小学校児童を中心とした公立小学校へ転入学に際しての要望運動が続いたが、学校の冬期休暇入りのために鎮静へと向った。この間、児童生徒



と引き離された朝鮮人教師たちの痛惜の念を在日朝鮮人の一詩人は次のように歌い残している。

さようなら
おれの子供たち

さようなら

四年間しか母国語を習う自由を

あたえられなかった子供たち

君たちを祖国に結びつけ

君たちを ふたたび

母国語を奪う敵からまもってやると

ちかかった この先生は

何一つまもってやることができず

まだ 十一月だというのに

早くおとずれた冬ざれの中で

君たちのふっている手が

町角をまがり

橋を渡り

畑をつつきって

小さくなっていくのを

見送るばかりだ

さようなら

おれの子供たち

さようなら

とりこになつていく

小さな朝鮮の同志たち

この先生は

君たちを

日本の学校まで送ることもできず

この閉ざされた学校の

この傷だらけの校門に立つたまま

君たちを送るのだ

さようなら

さようなら

おれの小さな仲間たちよ

さようなら

さようなら

元気でたたかってくれ

(許南麒「元朝鮮初級学校長の詩・五」一九四

九年十一月二日」より)

(ヤン ヨンフ・文学部非常勤講師)

第2章 象徴主義の先駆者たち

I ボードレールとかれに先立つ人々

山村嘉己

いかなる意味でも、象徴主義のもっとも正統的な先駆者はボードレールであろう。すでに紹介した『万物照照』の詩がその典型的な例であるばかりでなく、多くの美術批評や文学評論に見られる対社会の姿勢においても（後にふれるが）、かれはその後継者たちのもつ要素のほとんどを完全に先取りしている。それゆえに、あの反逆者ランボーですら、かれを《神》と呼んで別格に扱っているのである。しかし、そのボードレールも完全な虚無からの出現ではない。たとえばG・ミシヨールのように、かれも又《世紀の子》なのである。少なくともかれを生み出した先達として、三人の名前を忘れることはできない。

い。一人は異国の人でありながら、かれに想像力の秘儀を説きあかし、詩の創作もまた鋭い批評精神の発露であることを教えたエドガー・アラン・ポー（一八〇九〜四九）、——ボードレールはこの作家のフランスへの最初の完全な翻訳者としての名誉をもった——もう一人は『悪の花』を献呈される栄光をえたテオフィル・ゴーチエ（一八一〇〜七二）、さらには異色の幻想の花を咲かせたジェラルド・ド・ネルヴァル（一八〇八〜五五）である。

ここではフランス詩の流れを考えるとという立場から、後の二人について少しふれておきたい。



ネルヴァル

1 ネルヴァル Gérard de Nerval (1808~55)

一八九〇年代の象徴派たちには完全に無視されてはい

たが、ネルヴァルはノヴァリスらラインの彼岸の神秘家たちの系譜を受けて、この時代に「象牙の扉をこじあけて一挙に夢を溢れ出させた」のであった。この言葉を紹介している日・ペールは「神秘的な暗示力の強さという点で、後の象徴主義者ばかりか超現実主義者のすべての試みさえ、とうに凌駕している」(『象徴主義文学』堀田・岡川訳・クセージュ)と激賞している。ネルヴァルは精神病で何度も入院し、後に自ら縊れているが、その現実の狂気と、幻覚の創造とのふしぎな交錯はわれわれに特殊な感動を呼ぶが、かれ自身「ある超自然的な夢想の状態において構築された」と説明している『幻想詩集』などはいくつもの佳篇を含んでいる。たとえば「廃嫡者」を見てみよう。

われは闇黒——やもめ——そして心慰まぬもの
廢塔に住まうアキテーヌの王子。
わが唯一の星辰(ほし)は消え——黄金の琴にも
ただ「憂愁」の黒い太陽のみ輝く。

墓場の闇にあってわれに慰めを与えた汝
われにパウジリベの岬とイタリヤの海を還せ
傷つくわが心に快樂(たのしみ)をそそぎ込んだ花も

ぶどうにばらのからみつくあのぶどう棚も。

われはキュピッドかアポロンか、ルジュニヤンかピロ
ンなのか

わが額にまだ赤く女王の接吻のあと残り

人魚の泳ぐ洞窟で夢見たこともある

われはすでに二度 冥府の川を越えた

オルフェの琴にこもごも

聖女の吐息と妖精の叫びをのせて。

ここに見られる夜、墓、花、洞窟、地獄などは、ポードレールにおいてもいかに親しいイメージであり象徴であつたことか。この「魔嬪者」と並び称せられる「アルテミス」の中でも、「かの女の捧げるばらの花は、それは「たちあおい」……すみれ色の心のばら、聖ギユデュールの花……大空の砂漠の中に汝は十字架を見つけたか。純白のばらたちよ 落ちよ、汝らの燃える空より落ちよ——深淵の聖女こそわが眼にはさらに神々しい」と同様のイメージが展開されている。「夜」の中に《光》を求めるとのかれを《魂》の薄明の領域に徐々に入ることによって《地獄への下降》を成就し、真に近代の《冒険

家たち》の第一人者となつた》と指摘するG・ミシヨールは、それは《奇妙な《魂のかくされた力の探究》であり、限らない明晰さでその上に自らの天才の《鮮やかな光線》を投げかける夜の探究であつて、かれはその結果、豊かにかつ危険な真の夢の技術を獲得する》と述べている(G. Michaut: Message poétique du Symbolisme, 1966, 29ページ。以後この本についてはG・ミシヨールページであらわす)。(なおこのネルヴァルはゲーテの『ファウスト』の翻訳者であつたし、ワグナーへの傾倒をいち早く示していたこともここに附記しておきたい。さらにミシヨールはその後、同じ頃、別の半球で、このネルヴァルと同じ経験を味わつた詩人として、エドガー・ポーをあげ、アルコール中毒の両親からの悪性遺伝によつて極度の敏感な感受性をもつたかれが、その孤独な性格から、夢想家、さらに幻視者となりながら、独得の美意識を展開して行く過程を鮮やかに解析している。)

2 ゴーチエ Théophile Gautier (1811~72)

ポードレールがゴーチエを《完全無欠な》詩人、《言葉の魔術師》と呼んで「悪の花」を献呈したことは有名なが、このゴーチエはまた何よりも「芸術のための芸術」、「美のための美」を唱えた人として記憶されている。P・



ゴーチエ

マルチノの『高踏派と象徴派』（邦訳・木内、審美社69）などに詳しいが、ロマン主義がその地歩を固めたといわれる一八三〇年をこえると、文壇では芸術もまた社会の進歩に一翼を担うべきだとするいわゆる『効用派』、あるいはサン・シモニスムが台頭する。「民衆のための効用性」が「芸術の眞の基準」とコントは主張し、「芸術を新しい秩序の総体のなかへ組み込もう」とした。この主張はロマン主義の一面をよく示しているので、ラマル

チーヌやユゴーにもこのような《詩人の使命》への意識は十分に存在したし、ボードレールの初期にもその片鱗はうかがえる（後にふれるが『一八四六年のサロン』の序などを見よ）。ゴーチエもその例外ではない時期もあったようだが、芸術は人類のため、社会のため、道徳のためではなく、ただ、芸術自身のためだと考えるユゴーらに共鳴し、一八三四年の『モーパン嬢』の序文ではげしく美のための芸術を主張した。

《おお美よ、幸いにも汝を見つけることができたら、汝を愛し脆いて汝を崇拜するためにのみ我々は創られているのだ。……恋をする男であれ、詩人であれ、画家、彫刻家であれ、我々はすべて汝のために祭壇を築こうと努力しているのだ。》

これは文学や芸術の自律性の明白な宣言である。《芸術は私にとって手段ではなく目的だ、美以外のものを目ざすどのような芸術家も、私は決して芸術家と見なさない》と後ほどさらに明瞭にゴーチエは自らの信条を明らかにしている（一八五二年十二月『芸術家』紙）。そしてその実践として世に問うた『七宝螺細集』（一八五二）には次の有名な詩が収録されている（ただし五七年の第



ボードレール

三版だが。

そうだ、作品がより美麗に生まれ出るのは
作業に逆って抵抗する

ひとつの形式フォームからだ。

詩句であれ、大理石であれ、瑪璃であれ、七宝であれ。

しゃちこばった規則など問題ではない！

だが、まっすぐ歩むためには

ミューズよ

お前には履いてほしい きつちりした舞台靴を。

ありふれた韻律など捨ててちちまえ

あまりに大きすぎて 寸法の余る

舞踏のシューズのように

どんな足にもぶつかぶつかだ！

.....

すべては過ぎさる——堅韌な芸術、
それだけが永遠の生命いのちを保つ。

胸像こそが

都市よりも生き残るのだ。

そして 百姓が地の下から

掘り起す あのきらめかしい

記念硬貨が

皇帝の名を明かしてくれる。

神々でさえ死は免れぬ

だが すぐれた詩句の一つ一つは

残っているのだ

青銅などよりなお強靱に。

彫るのだ、磨くのだ、刻むのだ、

お前の定めがたい夢想が

しつかと閉じ込められるように

抗い逆らう魂のなかに!

(「芸術」)

この短かい詩では審かにはできないが、それでも詩型への配慮、作詩術の巧妙さはいかがい知れよう。

ゴーチエがボードレールに与えたものはこのほかに、たとえば『アルベルチュス』(一八三二)や『モーパン嬢』

(一八三三)らの物語のもつ怪奇趣味、あるいは長詩『死の喜劇』(一八三八)の示すロマン派的憂愁や人工的美への趣向なども見逃せないが、やはり、この芸術的な完成へのひたすらな傾倒こそが根本的にボードレールの魂をとらえたと考えられよう。

3 ボードレール Charles Baudelaire (1821-67)

(1)

象徴主義とボードレールとを結びつけようとするとき、だれもがすぐ思い浮かべるのはすでに引用もしたあの

「照應 (Correspondences)」の詩であろう。しかし、ここでは視点を變えて別の接近を試みてみたい。

君たちは多数を制している——数と叡智。——それ故、君たちは力であり——それは正義である。

.....

君たちは都市の支配権を握っている。それは正しい。君たちは力なのだから。しかし君たちは美を感得する力を持たねばならない。なぜなら、今日、君たちのうちの誰もが権力なくして過しえないように、いかなる人も詩なくしてすまず権利を持たないからだ。

君たちは三日間パンなしで生きることができ。詩なくしてはけつして。もし君たちのうちに、この反対をいう人があれば、それは間違っている。その人たちは己れを知らないのだ。

.....

ところで、君たちには芸術が必要なのだ。

芸術はきわめて貴重な財宝であり、心をさわやかにし、また暖める飲物であつて、胃と精神とを理想本来の平衡状態にもどしてくれる。

これがあの反俗の詩人ボードレールのことばとだれが

短評募集!!



短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれ
 ぜひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた
 本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎3387-9998 (直通)

☎3388-1121 (内線 4821)

考えようか。しかし、間違ひなくこれはかれの『一八四
 六年のサロン』の序文、「ブルジョワに」の一節なので
 ある。ここでは些かの皮肉をこめてはいても、ブルジョ
 ワを力と正義と認め、かれらに芸術の享有の仕方伝え
 ねばならないと考えているボードレールがいる。このこ
 とは重要である、ボードレールが最初から反俗の詩人では
 なかったということは。つまり、ブルジョワと文学者、
 芸術家との相剋は、まだ微妙な駆引きの段階にあったと
 いうことであり、それはロマン主義の命脈もまた、まだ
 尽きていないということである。

しかし、四八年(二月革命を思い起そう)を境に状況

は変化しはじめる。ボードレール個人にとつてもそうであ
 ったように。そして五〇年代には両者の乖離(乖離)は決定的
 となる。それはボードレールにあっては『悪の花』裁判
 事件に象徴されている(まさにこの同じ年、フローベ
 ルの『ボヴァリ夫人』も告発を受けたことを忘れてはな
 らぬ。もっとも、この両者の判決の対照的な結果が、こ
 れ以後の詩と小説の運命を暗示しているというのはやや
 早計にすぎないだろうか)。そして同じ美術評論でも『一
 八五五年のサロン』では画家ドラクロワの現代性を高く
 評価し、『かつてかれほどに攻撃され、嘲けられ、妨害
 された芸術家はない……どこかのブルジョワのサロンで

の騒々しい悪口、酒場にたむろする画家生たちの悪意にみちた論説などは私たちになんの関係があるうか」と論陣をはって、自らの詩を名を秘しながらも、ドラクロワに捧げている。

ドラクロワ　しばしば墮天使の訪れる血の湖

そこに常緑の樅の林は影を落し、
悲しみの空のもと　奇妙な吹奏楽が流れる
ウエーバーの押し殺したため息のように。

血の湖は赤。―墮天使の訪れるは超自然主義。―
常緑の林は赤の補色、緑。―悲しみの空はかれの画面の騒々しい嵐を含んだ背景。―吹奏楽とウエーバーはかれの色彩が呼びさますロマン派音楽の観念である。

この詩と解説はまさしく『悪の花』の主調低音の一つを解き明かしている。

そして『一八五九年のサロン』では、ボードレールは何はばかりことなく『反俗』の姿を展開し、『諸能力の女王』としての『想像力』の重要さを指摘する。かれにとっての『想像力』とは



『悪の花』のためのドラクロワのイラスト

《あらゆる創造物を解体し、その解体された素材を、
塊のもっとも奥深い部分からのみ生まれてくる規則に
したがってよせ集め配置することによって新しい世界
を創り出し、新しいものの感覚を生み出す力》

にはかならなかつた。これは《照應》の世界にきわめ
て近いものであるというまでもない。さらに一八
六三年の『現代生活の画家』に到つては「ダンディ」
の項目をたてることによつて、法律の外に屹然と立つ
自己崇拜の権化、《かたむく太陽さながら、壮麗で、
熱を欠き、憂愁にみちている》芸術家像を創出するこ
とに成功したのであつた。ここにおいてボードレール
は間違いなく象徴主義者の対社会の姿勢の原像となり
終せた。今度は章を改めてかれの象徴主義的理論を考
察してみよう。

先に指摘した「照應」⁽²⁾の巧みな《香りと野の色と
幼な子の肉の潤いとオーボエの音などの間にある《水
平的照應》の描出を讀えながら（『象徴主義文学』ク・
セージュ）、H・ペールは、このボードレールが『悪
の花』では、《象徴》^{サンボルク}という名詞は一回、《象徴的》^{サンボルク}と

いう形容詞は二回しか使っていないと注意を呼び、し
かし、《しるし》^{アンブレム}とか《寓意》^{アレゴリー}とか《神話》とかいっ
た言い廻しで、現実の奥に迫るかれの詩法の象徴性を
高く評価している（この点では長詩「白鳥」のすばら
しさを忘れることはできない）。

しかし、つぎの「髪」のような詩の場合、その《水平
的照應》はさらに深化されて《垂直的照應》をも誘い出
す。それは《具象的なものを高次の領域——《アイデア》
の次元ないしは神秘的で《天使的な》一体化の次元
——へと高めることによつて、それに密度と意味を与
えるもの》とペールは言っている。

首筋まで豊かに波打つ おお たわわな髪の毛よ！
おお 捲毛よ！ おお けだるさ溢れる香りよ！
夢見心地よ！ 今宵この髪の毛に眠る追憶を
仄暗い閨房^{ひや}いっばいにくりひろげようと
わたしはこの髪をハンカチのようにうちふりたい。

ものういアジャも 燃えさかるアフリカも
遠い々々不在のほとんど死にたえた世界がすっかり
お前の深みの中に生きのびる ああ薫りの森よ！
人びとの心が 音楽にひかれさまようごとく



ボードレールのデッサン

わたしの心は おお恋人よ お前の薫りの上を漂う。

詩人はこのように《不可視なるもの》を説明する使命を持ってゐる。そのために先にもふれた《想像力》が必要であり、それによって万物の中に流れる《普遍的アナロジー》を理解するのだ。もう一つ別な例をみよう。

今しも訪れるこの時 茎の上にかすかにゆれて
花はみな釣り香炉となつて香りにむせび、
音と薫りが 夕べの空に乱れ舞う。
憂愁のワルツよ 物うい眩暈よ！

花はみな 釣り香炉となつて香りにむせび、
ヴィオロンは、悩む心さながらに身をふるわせる
憂愁のワルツよ 物うい眩暈よ！
空は大きな祭壇のように 哀しくも美しい。

ヴィオロンは、悩む心さながらに身をふるわせる。
はてしなく黒々とした虚無を憎むやさしい心よ！
空は大きな祭壇のように、哀しくも美しい。
太陽が凝る血潮に身を沈めた。

はてしなく黒々とした虚無を憎むやさしい心よ！
光ある過去からすべての名残りをくみとるのだ。
太陽が凝る血潮に身を沈めた……
君への思いがわたしの胸に聖体盒のように輝いている。

このような《垂直的交感》を、Ch・チャドウィックは

超絶的象徴主義と名づけ、この「夕べの諧調」を楽園的幸福感の代表としながら、一方、一個の地獄の喚起として「憂愁」詩篇を対照に挙げている。

空が蓋のように 低く重々しく
久しく倦怠のなかに呻く精神におおいかかり
とりまく地平いっばいにひろがって
夜よりも暗い昼をわれらに流しかけるその時

大地が湿った土牢と化して
希望は こうもりに似て臆病に
羽ばたき 壁をかすめ
崩れる天井に頭をぶちつけるその時

さらに 雨が降りしきって牢獄の
鉄格子さながら 人々を降り込め
折しも 忌わしのくもの一群あらわれて
われらの脳髓の奥に巢の網をはりわたすその時

突如 はげしく鳴りひびく鐘の音は
空に向けて 恐しい唸りを投げかける、
故国もなく さまよい歩く精神の

執拗に呻きはじめる様と同じく。

—そして今長い葬列だ、太鼓も楽の音もなく
しずしずとわが魂のなかを通過する。
希望は打ちのめされ 涙し 苦悩は残酷にも勝ち誇り
わがうなだれる頭蓋に黒い半旗をうち立てる。

(七八「憂愁」)

このように視線がバリに向けられるとき、ボードレー
ルの世界はつねに苦悩と不安の色に染められる。それは
バリこそがかれにとつて現代の人間のもっとも象徴的な
集合体であり、「バリ情景」を思い出そう)、その現代の
人間の根源的な病いは《倦怠(Burnt)》であり、その表出
が《憂愁のDreie》にほかならないからであろう。ここ
に(1)で示したボードレールの対社会の姿勢の反映を見る
ことも可能であるし、H・ペールのようにリアリストの
手法を汲み取ることも可能であろう。しかし要するに「赤
裸の心」でかれ自身も明かしているごとく、《ある種の
超自然的な魂の状態においては、どんなありふれた光景
であれ、眼前の光景のなかに、人生の深みがそっくり現
われる》(「火箭」17)のであり、それが象徴なのである。
ただ、ボードレールに首尾一貫した哲学や美学の体系

を求めることは無理なのはいうまでもない。それはかれの人生そのものもそうであったように、つねに揺れ動いてやまないものであった。かれ自身が認めている《二つの指向》(上昇と下降)のせいでもあったし、そもそも『悪の花』の構成は単純に『善』と『悪』との二元論であつたらう。それゆえ、かれに親しい『吸血鬼的』趣向、『ほくの魂は墓穴だ、悪僧のほくが住みついですでに久しい』(『悪僧』)、『ほくは月光に呪われた墓場、悔恨にも似た長いうじ虫がはい廻り』(『憂愁』)などのイメージに古いロマン派の要素を指摘する人も多いし、かれの詩句の彫琢にあまりにも人口の技巧へ走る欠陥をあげつらう人も少なくない。ランポーがすでにかれを詩人の神と名づけながら、『あまりにも芸術家すぎる』と非難した所以である。しかし、ボードレルの本質はこのように相反する二面性を有しつつ、つねに『別の世界』を求めて旅立とうとする執拗な努力の中にある。有名な『悪の花』の念入りの構成はその何よりの証拠であらう。初版が呪われた詩人の出生ではじまり『脳髓の花を咲かせる』希望をもった『芸術家の死』でその静かな円環を閉じるのに対し、再版が未知の世界に開かれる『旅』で終りを告げるのはさわめて示唆的といわねばならない。

ああ「死」よ、年老いた船長よ 今こそ時だ
錨をあげよう!

もうこの国にはあきあきした、ああ「死」よ 出発だ
もし 空と海とがインクのように真黒でも
君の知るわれわれの心は光明にみちている。

君の毒をわれわれに注げ、それは大きな力となる。

その火がわれわれの脳髓を焼きつくすから

「天国」も「地獄」も何かまうものか 深淵の奥深く
新しさを求めて「未知」の底へと跳びこんで行こう。

(フランス文学科教員)

連

載

日本中国ことばの来往ゆきぎ

その40

芝田 稔

解放後の新語について (3)

不発言権Ⅱ黙秘権」 読んで字のとおり発言しない権利、つまり黙秘権のことである。別に「沈黙権Ⅱチェンモ・チュアン」ともいう。例文：「発言権は一項民主権利、而不発言権也是一項民主権利、由于種種原因人們对一些問題保持沈黙、這種自由也應該受到尊重。(発言権は一つの民主権利であるが、黙秘権も一つの民主権利であって、種種の原因によって人びとがある問題について沈黙を守るといふ、このような自由も当然尊重されなければならぬ。)」

利改税Ⅱリーガイスイ、税制の一、税制改革によって国营企業がその利潤を国家に上納していたのを、国家で規定した税種と税率を基準にして納税することに改めたことを指す。例文：「実行利改税后、国家与企業的分配關係基本得到解決。(利改税を施行してから後、国家と企業の分配關係は概ね解決を見た)」

四二一綜合症Ⅱスー・アル・イ・ゾンホージョン」中国のひとりっ子政策から生じた社会現象で、家族の全員が子供を溺愛することを用い。つまり一人の子供に対し両親の二人、さらにその両親である祖父母と外祖父母の四人を指している。このように祖父母をも含めてひとり



つ子を溺愛する風潮は児童の健全な發育に障害となつて
いる、といわれているもの。

人情方ニレンチン・ファン、医者が病状を根拠とせず、
人情を基にして出す処方のこと」例文：「這批处方是某
些医生利用職務之便、為熟人和關係戶多開藥、開好藥的
人情方。（これらの処方は少数の医者がその職務上の便
を利用して、知人や特殊なコネのある人のために薬を多
く出し、好い薬を出す処方です）」

氣管炎ニチーワンエン」読んで字のとおり氣管支炎
のことであるが、この中国音に他の漢字を当てると「妻
管嚴」、つまり妻の管理が嚴しい、という意味になり、
恐妻家のことを病氣にたとえた流行語の一つ。

新語として扱われた一つのことばが、時の流れとともに、
何時の間にかその内容を変えていることがある。例
えば「四化ニスーホワ、四つの具体策」ということばで
あるが、これほどその内容をいろいろに変えたことばも
珍しい。

「四化」の中で最もポピュラーなのに「四个現代化
四つの近代化」ということばがある。これは一九七七
年以後に提唱された政策であり、二十世紀末までにその
実現を計ろうとするものであった。つまり農業・工業・

国防・科学技術の四つの近代化を目指すものであって、新憲法にも盛り込まれており、この国民運動のことを「第二の長征」とか「新長征」などといわれたものである。ところが「四化」ということばはそれ以前にも、いろいろなところで使用されていた。例えば一九五八年の人民公社化の時期での「四化」といえば、組織の軍事化、行動の戦闘化、生活形態の集団化、管理の民主化を指していたのである。さらに六〇年代になって人民公社の形態が整った時点では、農業を対象として起こった「四化」運動もあつた。これは農業の機械化、水利化、化学化（化学肥料の配給を増加すること）、電化を指し、また農業の大躍進といわれた時期には、児童教育のグループ化や食事の食堂化、裁縫の機械化、食糧加工の機械粉食化を指していたこともある。しかし、これらはいずれも過去の一時期の施策としてその名を留めているにすぎない。では現在はどうか。そのスローガンを見ると対象は共産党の幹部に限られており、幹部の革命化、知識化、專業化、若年化を「四化」といつているのである。

四大件Ⅱ四つの神器」このことばもその内容が複雑である。一九五〇年代では腕時計、自転車、ラジオ、ミシンを指していたのであるが、八〇年代以後はカラーテレビ、冷蔵庫、ラジカセ、洗濯機の四種、今日ではオー

トバイがせり上つて来たようである。

「四大Ⅱスーター」これは文革中に最も民主主義的な方法として提唱されたスローガンであり、大いに論争し、大いに意見を發表し、大字報（主要記事を貼り出した壁新聞）を貼り出し、大弁論を展開することの四つを指していた。

「五大Ⅱウーター」というのもある。これは五種の大学という意味である。これは正規の大学以外に大学と認めている各種の大学、つまり「電視大学（テレビ大学）」「夜間大学」「函授大学（通信大学）」「業余大学」「職工大学（職員大学）」の五種類を指している。

『北京好日』の中国語訳本

林語堂の小説『Moment in Peking』が、またまた『京華煙雲』という表題をつけて中国語に翻訳されて、いままた中国ではすでに十六万部が出尽して静かなブームを呼んでいるそうである。この小説が「また」中国語翻訳された、というのは、曾て戦争中にも翻訳されたことを想い出したからである。

林語堂といえは五四文化運動の中では「ユーモア作家」として知られた言語学者の一人であり、魯迅とも交友関係にあり、魯迅が北京を追われて南下した際、アモイ大

学にいた林語堂が、一時魯迅を同大学に迎えたこともあった。だがその後互いに袂を分かってから、林語堂は米
国に移住して文筆活動をつづけていた。戦後のひと時で
あるが、シンガポールに華僑が設立した「南洋大学」注
からその初代校長として迎えられたこともあったが、一
年足らずで米国に帰り、すでに故人になつてゐる。

彼がこの長編小説を発表したのは一九三九年八月で、
米国のジョン・タイ社から英文版で出版された。最初こ
の中国語訳に手をつけたのは、黄秋耘の『文学絮語』に
よれば、作家として有名な郁達夫であったといわれてい
る。しかし郁達夫はその最初の部分を訳しただけで、遂
に完成しないうちに、太平洋戦争が勃発した。そして周
知のように彼は戦後間もなくスマトラで日本軍によって
殺害されたので、遂に彼の訳本は出なかつたのである。

中国での最初の訳本は鄭陀・応元杰の共訳本であり、
一九四一年に上海で出版された。これは『瞬息京華』と
いう表題であり、筆者は北京でこれを読んだことがある
が、いまは印象に残っていない。というのは、その後に
読んだ老舍『四世同堂』の筆力の重厚さ、緻密さの前に
その姿を消したのである。もつともこの訳本には林語
堂が不満を漏らしたというから、それはやつつけ仕事で
あつたのかも知れない。当時日本でも『北京好日』とし



『書評』編集 STAFF募集!!



て訳されたようであるが未見のままになってしまった。
 ただ林語堂の作品の中でいまも印象に残っているのは、
 彼の隨筆『生活の発見』（新井格訳？）である。この訳
 本はとても評判であったことを覚えていいる。生活の中に
 芸術性を求める彼の生活態度を論じたものであり、軽妙
 な筆致でユーモアを交えつつ、彼の自由人らしい伸び伸
 びとした生き方、その真骨頂を披露していた。非常時一
 点張りで、物資不足の戦時下にあつて、窮屈な学生生活
 を送っていた筆者は、この『生活の発見』から、どうす
 れば豊かな気持ちで暮らせるのか、その一端を教えても
 らったことがある。他愛ないことであるが、禁煙を決心

して数日も経たないうちに、あの訳本に出会ったばかりに、何のためらいもなく、再びあの『紫煙』の魔力に魅入られてしまったのであった。今は昔、あれから三十余年間も『紫煙』の虜になつていたが、胃潰瘍手術によつてプツリと断ち切ることができたのである。
 閑話休題。戦後一九七七年に台湾の徳華出版社から張振玉の訳本が出版されたそうであるが、さらに七八年二月、この訳本に若干の手を加えて出版されたのが、吉林・時代文芸社刊行の『京華煙雲』だそうである。この訳本は曾ての上海本『瞬息京華』よりも原著に忠実に訳されていると評されているが、文章がごつごつして荒っぽく、

『書評』は私たちにによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創つてみませんか。
 「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやってみたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになつてみましょう。
 私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。
 ★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1
 関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会
 ☎ 3387-9998 (直通)
 ☎ 3388-1121 (内線 4821)



筆者近影（後方の碑が武後の建立した「無字の碑」）

林語堂特徴の軽妙さ、流暢さに乏しく誤訳も多いようである。例えば「点菜」料理を一品ずつ注文する」と訳すべきところを「支配菜單」メニューで指図する」、また「桐城謬種」桐城派のまちがった言論」とすべきを「罪惡的種子」罪惡の種」等と誤訳しているので、林語堂の気に入るような訳本は、本人以外には望めないようだし、本人がすでにいない現在、問題は永久に残りそうである。

碑文の無い記念碑

西安へは三回行く機会があった。一九六六年五月、七年六月、九〇年四月の三回であるが、後の二回とも陝西省乾県の乾陵を訪れている。これは唐高宗と武后則天の二人を合葬した陵墓であり、麦の段段畑が幾重にも続く遙か彼方に、一際目立って高い山と見えるのがそれである。陵墓入口の望楼があったという俗称「奶山」ナイシャン——遠望すると陵墓参道の手前両側に、ふつくと形のよい乳房の格好をした大きな土饅頭が二つ、これが陵墓を宮城に見たてた城闕のあった台——がある。その間を参道は爪先上りに数百米も続く。観光客は陵墓の上まで行くことはなく、参道に昔の面影を残す神獸や外国使節の石像までぐらいだ。不思議なことに、この等身大以上の石像群はすべて首から上が無い。説明に

よれば、明代の頃この地方に悪疫が流行した折りのこと、この外国人たちが崇^たつていているという理由で、顔はすべて削り取られてしまったのである。これら三十数体の石像の中には、当然日本の使節もいたはずで、高宗の葬送に供^ぐ奉^{ほう}していたことであろう。

もう一つ、ここには珍しい石碑がある。それは武后則天が自分のために建てたという「無字碑」である。

この乾陵はもともと武后が計画し、建造したものである(碑)には五千字を超える長文を撰し、皇帝生前の吉兆から書き起こし、生涯孝養を尽くし、如何に文治武功の実を挙げて国威を宣揚したかを褒め称えている。しかし参道を挟んでこの「述聖碑」と相對している武后の「無字碑」——一字も刻んでいない石碑——の方が堂々としているのは、その外觀もさることながら、二人の歴史的実績に由来するイメージの違いからも知れない。だが武后がその遺言で「己ノ功罪ハ後人ノ評ニ留メヨ」と諭して、自分の碑には一字も彫^ひらせなかつた、と伝えられている。沈黙は雄弁にまさることを心得ていた女傑であつたに違いない。今日でもこの辺りの農民たちが「乾陵^ニチェーンリン」のことを「姑婆墳^ニクーパーフェン、おばあさまのおはか」と呼んでいることから窺えるのであ

注

「南洋大学」は戦後華僑有力者たちがシンガポールに設立した文科系総合大学で、日本では中国語の研修生を受け入れてくれる海外の大学として知られており、日中国交回復以前では台湾大学や香港中文大学について、日本留学生が多かつた。一九七二年一〇月筆者は語学研修で欧州からの帰途同校を訪れ、最新の視聴覚機器利用による語学教育を参観したことがあるが、それから十年後にシンガポール大学へ公務出張されたY教授のお話によれば南洋大学は既にシンガポール大学に吸収されていたということであつた。

(しばた むのる・文学部非常勤講師)



■短評■

「壁のない病室」

栗原 雅直

中央公論社／定価二五〇〇円

「精神病院」や「精神科の病室」というと、一般的にはそれ専門の病院・病棟のイメージではないだろうか。そして、「精神医療・病院」を扱った本においても、多くの場合は「精神病院」のワク内での閉鎖から開放へ向かわなければならぬというものである。だが、筆者は「自分や自分の家族が入院したいと思うような病院をつくらう」、「精神科の患者も、よその科の患者も同じよう

にあつかわれるべきだ」という言葉に触発され、「内科や外科の患者と精神科の患者とを、区別なしで入院させる」開放・混合の病棟を作ったのである。それは、「精神病院」における開放よりも更に進んだものである。そして、「精神病院」における開放の中にある差別性をも明らかにするのではないだろうか。つまり、あくまでも「精神医療」という限定されたワク内のみで捉われてしまっていることは、肉体の病気を「正常」とみなし、「精神病」を「異常」と区別することが根底にあるということである。ところで、現実に開放・混合病棟を昭和41年から実施し続けることができたのも新しい思想に基づく充実した総合病院であった点が非常に大きな基盤になっているのだろう。

また、日本における精神医療の構造的腐敗が端的に表れた宇都宮病院

事件の原因について、医師として分析している。その中では、閉鎖空間において絶対的強者の権力が、いかに暴力と支配へエスカレートしやすいか、を述べている。それは、ナチズムを推進した心理となんと似ていることか。医療者と「精神病患者」だけの世界では、支配—被支配という構図はたやすく生じてしまう。それを防ぐためには、外の社会に開放することが、やはり第一なのだ。

また、精神病者が自分や他人を傷つける可能性のある時、強制的に入院できる法律がある。「冗談」と言われてはいるが、「運転されている時はまさに自傷他害ですね」との言葉は、とても考えさせられる内容である。交通戦争の現在、我々は誰もが自傷他害となり得るのである。

多くは筆者の出会った人々のエピソードであるが、光るものも多い本である。（社会学部 川野旅人）

私たちは日常、さまざまな消費活動をおこないながら生活を営んでいる。そして消費活動と切っても切り離すことの出来ないものとして広告が存在している。周囲を見渡せば、実に無数の広告が私たちを取り囲んでいることに気づくだろう。テレビのコマーシャルや新聞の折り込み広告、電車やバスの中にも下がつて

いる広告、その他にもダイレクトメールなど、その種類は多岐におよんでいる。そして、これらの広告に私たちは大きな影響を受けている。情報化社会といわれる現代、広告のあり方、その果たす役割も多様化してきている。情報化が進むあまりかえって情報洪水をまき起こし、本来に知りたい情報を見つけることが難しくなるという矛盾も出てきている。情報供給量は増加する一方であるのに、情報消費量は減少しているという現象がそれを物語っている。この現象は広告にもあてはまり、現代の膨大な量の広告がどれほど消費者への情報提供に役立っているか疑問になってくる。これは、広告の効力の低下にもつながっていく。そういう意味でも現在の広告のあり方は大きな課題と直面しているといえる。筆者は本書の中で「ツー・ウェイ・コミュニケーション」という言葉を用いているが、これは広告を提供する企業と生活者の間の「対話」のこ

とである。現在の広告の課題としてこの「ツー・ウェイ・コミュニケーション」があげられている。企業は一方的に広告を送るだけでなく消費者の立場に立った広告を展開するべきだろう。そしてこれまでのモノ消費から情報消費へ、企業社会から市民社会へ、量の追求から質の追求へという生活者のライフスタイルの変化に対応した広告を提供していかなくてはならない。時代と共に私たちの生活も変わり、広告も変わっていく。これからも広告は進化し続けていくだろう。

本書では、現在の広告の問題点をはじめとして、メディアの多様化に伴う広告の変化などが、時代の移り変わりに対比させて興味深く論じられている。高度情報化社会の一面を知るうえでも格好の一冊といってもよいだろう。

(社会学部三回生 若紫)

■短評■
広告進化論



TBSブリタニカ/定価二三〇〇円
 森 俊 範
 [本体一四五六円]

昭和という時代を考えると、幾つかの世相というか時勢みたいな形で区分してしまっているところがある。

まずひとつに、いわゆる昭和初期という時代。昭和二年に金融恐慌があつて、昭和は暗い幕開けをする。次に、日本は満州事変をはじめとして侵略戦争という道を進む。昭和を語るときに避けては通れない過去を日本は背負っているのだ。そして、これは単に、日本だけの過去ではなくて、朝鮮、韓国、中国、東南アジアという近隣アジア諸国をはじめ、

全世界的にみても、あの戦争は相当な傷跡をつけてしまった。先の湾岸戦争でもそうであつたように、いつの時代でも戦争の一番の被害者は名もない市民であり兵士である。

戦争で内外二千数百万人の犠牲の上に、たつた一つ、われわれが得たものは新しい憲法であつた、と本書は語る。そして何よりもまず、この平和憲法を私達はしっかりと守ることが肝心なわけで、そうでなくては世界に誇れる平和憲法たりえない。

だが、今回の湾岸戦争に際しても自衛隊の海外派遣などといった具合



に、憲法のどこにもそんなことは書いていない論議がどこともなく浮遊して来たりするから、戦争という動揺ですぐに方向性を見失う今の日本の政治土壤では、平和憲法が宙ぶらりんとなりかねない危険が大いにある。平和というものは常に壊れやすいものだと、このことを見せつけられた気がする。

平和憲法が出来て以降、戦後の日本は信じられないほどの経済成長を達成したが、そこにはまた新しい大きな課題が生まれた。それは、日本の経済援助には友好的だが、実際の政治関係になると、まだまだ信頼できないという国際的コンプレックスのことである。形式上はあの戦争における近隣アジア諸国への謝罪などを行つたりしているが、実際の民衆の傷は未だに癒されていない。

僕なんかの世代までは過去を振りかえれる教育過程というか教材があ

つたように思う。はたして今の子ども（こういう言い方は避けたいのだが、自分が『子ども』という領域に、もう戻れないようである）の目には、戦争はどのように映っているのだろうか。言いたいのは、今の子ども達の身のまわりには過去を振りかえれる機会がほとんどないのではないかとということだ。例えば、遊び道具ひとつにしたって今は最先端のテクノロジーを駆使したもので取り囲まれているわけだし、先へ先へと前向き思考があつて少しも後戻りはしない。ますます過去は隠蔽されてしまふ。

昭和三〇年から四〇年の間で育つた子ども達が共有できた知識や感性と、昭和五〇年（僕の子ども時代）から今現在の子ども達が共有できたものとは、同じ十年という間隔ではあるけれども、かなりの時間的性質における差異というか、そんなも

のがある気がする。それは僕らが子ども時代に一―二年かけて熱中した事を今の子どもはすぐに取り入れてすぐに消費してしまうという「子ども」のライフスタイルの変化、ひいては社会全般の変化ではないか。そういう時代的スピードだから、「語りつがれるもの」も、その背景に溶けてしまふのではないかとという危惧がある。

昭和という時代が取り残したものとして天皇制は、まさに取り残された「装置」である。今私達は、この置き去りにされたタブーを解決すべき時ではないか。本書に出てくる本島長崎市長は言論の自由という問題と常に闘つて来た人である。次の世代に「語りつぐ」という意味でも、また、原点に返つて、国とは何なのか、人が生きるとは何なのか、を考へる意味においても言論の自由として民主主義はとても大事な課題で

ある。

本書で紹介されているフランスの啓蒙学者ヴォルテールの言葉が印象的である。

あなたの言っていることは一つも賛成するところはないけれども、しかしあなたがそれを言う権利は自分は命を賭けても守る」

（法学部三回生 花田暁彦）

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F『書評』編集委員会までお問い合わせ下さい。

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生生活協同組合本部3F組織部内『書評』編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線4821)

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行（二五〇字）を一枚と計算します。

▼枚数は自由。（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。）

▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入

STAFF募集

「書は何だか
ためになる…」



新しい可能性を求めて
君も書評編集活動を!!

興味のある方はいつでも生協3F組織部まで!!

お待ちしております。

TEL. (06) 387-9998



編
集
後
記

新入生の皆さん、入学おめでとう。

「書評」95号を読んでどうでしたか。現在のヴィジュアル時代であっても、やはり情報の詳細な面は印刷物に多くを委ねるのが現実です。更に、過剰とも言える出版物の中で、どのように私達がより「真実」に近づくことができるのか。そして、その「真実」はいかなる性格のものかを理解するための様々な手段として、12人の先生方による読書案内を特集しました。

私達、「書評」編集委員会は読書を「その時代社会を読み解く」手段だと考え「書評」も同じように取り組んでいます。ぜひとも、新入生の君達の斬新なアイデアを「書評」にぶつけて欲しいのです。投稿・短評、そして特に編集部員を大募集しています。興味のある方は、生協本部3F組織部まで、いつでも大歓迎です。

『書評』 1991年4月号 通巻95号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部 『書評』編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 〈内線4821〉 or 387-9998)
頒 価 250円